

靈術秘書

飯沼市下寺町六〇
靈道研究会

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



持116
305



靈 道 研 究 會

會長 松原 盛樹 述

靈術秘書

合冊

極意編 下編 中編 上編

大正
15. 7. 31
内交

修 養 訓

なせば成る
なさねば成らぬ
何事もあらぬは
人のなさをあらぬ

塵山



靈術書



靈術書

合

本書の精神

一、本書は深奥的の史地論を採り、著述なる學問は是れを以て、
 従らに學者稱てむべし、さるべき字句を著述することとを避り、いか
 なる初學者にも適ちて実行自在ならしむるやう短刀直入的
 に要所の奥義を解説せしむるなり。
 一、書の體裁は外観形式に存するものにあらず、内容の如何に
 著の多少を以て論ずべし、本書もとより不厘や紙屋の類
 にあらず、本書、著を辨るの士には遠せざれども、もとま
 り本書は実行のそむ士ゆゑに、そのせるものあり、外観
 論の故をもつて本書を軽ろと侮り、修養を養ふるをみかれ。

〔附記〕 本書は原本の正意を要せしめたる體裁印刷とせし
 に付、文字の不明の處は悉く縮印らざるを以て、印刷を乞ふ。
 活版書發行の費は悉く極小にて引かへす。

播州姫路市下寺町六〇

愛道研究會本部

編上

催眠術講義

頁三十四五

THE HIPNOTISM.

第一章 催眠術沿革

催眠術の實行をのぞむ人に斯術が今日迄いかなる道程を辿つてきたかを、お話するのは一見素直の感があるが、今その概略を話すこととする。

催眠術が学術的に研究されるやうになつたのは、蓋三十四年程の間であるが、その濫觴は遠く古来より存在してゐるのである。第十六世紀以後、占星術、鎮物磁気説と云ふ二つの説が流行し、更にメスマルの動物磁気説となり、動物磁気説から催眠が生れたのである。其後、プリード氏やグライムス氏、ベルンハイム氏、ボニーニ氏、リエーゼオア氏、シヤルコー氏、ハンデンハイム氏、モール氏、フオーレル氏等の各国有名なる學者により大いに研究せられたのである。

海外に於ける研究は大體右の如くであるが、我國に於ても明治世年頃に高島平三郎氏や大澤博士等が一時的に研究せられ、明治廿五年頃には山口三文助氏や小野福平氏等の大家が出で、明治三十八年には、東京帝大に於て神経学会總會が開催せられ、其席上、文學博士福永友吉氏の催眠術に関する講演があり、その翌年には國家医学会より「催眠術及び暗示論集」と云ふ書を刊行し、我が國學者の諸説を發表しました。この間に於て統々知名の士の研究せらるゝところとなり、大沢、遠山、岡田、元良の諸博士は大いに斯術に関する説を發表し、三十九年には東京醫學廳に於ても、この術の講演があつたのである。かく催眠術の隆盛となるにしたがひ何式何流と之が宣傳する人々も増加し、学理に實驗に、以つて今日の隆盛を見るに至つたのである。

一 従来催眠術をば探偵小説中の架空的記事なりとし、又は丁術視したる人々も今やこの術の存在を疑ふ者なく、一つの学術語として詳典の中にも加へられ、最高学府はこれを教科の一に加へるに至つたのである。之が應用の範圍は廣汎で、治癒に癡癡に、氣徳の増進に性質の改善にと凡ゆる方面に應用さる

2-
つに至つたのである。素の如く精神の存在は今や絶対的疑念のころなく事は技術の巧拙を云々するのみとなつたのである。不肖の生又新界に身に及び研究するに至つたのであるが、小生は廣大無辺の宇宙を有より推測して、空の深遠に反照し、古今幾多の變遷を遠見し、歐米大衆の精神を鼓舞とし、幾多の實験を重ねて遂に發見したのであつて何人といへども本書の示すとほり神妙に行はば成功は疑ないのである。

第二章 暗示の解説

第一節 暗示とは何か

- 暗示とは簡單に云へば觀念を方便として心身を左右する作用のことである。今二三の實例を示すと、
- (一) 梅や櫻柑のことを思ひ出した時には自然に口中に唾液の湧出を、おぼへ又亡きものこと兄弟のことなどを考へてはホロ／＼と落涙することがある。
 - (二) 昔怪事があつたと傳説のある所を歩くと思ひ來ら進つてゐると枯木花が動いても化物に見ゆるものである、又人を持つ時、カサリと木の葉が落つても人の足音かと思ふものがある。又また空を飛ぶにこりすぎい瀧にでも、うたれる内に指輪の／＼と思ふ餘りドードーと響いてゐる瀧の音の中に、佛様や神様の聲がすると誤考したり、又高山の上などで雲や霧の中に、光線の見合で自分の影が属することゝ生々あるが、それを彌陀三尊の御姿であるなどと誤解することがある。これを直ちに以て尾に鰐をつけて世間云々みふらしたりするから迷信に陥るのである。
 - (三) 佛圖説元祖として有名な教祖のコツボ博士が、その學說を招かしてゐる時、同じ教祖のバツテンコ、川フエル、又又エヌメリツビの兩名は其學說に反対し、遂に理論よりも情緒として、純粋培養のコレラ菌を水と共に吞下したが生命に關係はなかつた。同じく教祖のワイロウルユリ氏は數名の悪魔學士

暗示の作用は、素の如く精神の存在は今や絶対的疑念のころなく事は技術の巧拙を云々するのみとなつたのである。不肖の生又新界に身に及び研究するに至つたのであるが、小生は廣大無辺の宇宙を有より推測して、空の深遠に反照し、古今幾多の變遷を遠見し、歐米大衆の精神を鼓舞とし、幾多の實験を重ねて遂に發見したのであつて何人といへども本書の示すとほり神妙に行はば成功は疑ないのである。

暗示とは簡單に云へば觀念を方便として心身を左右する作用のことである。今二三の實例を示すと、

(一) 梅や櫻柑のことを思ひ出した時には自然に口中に唾液の湧出を、おぼへ又亡きものこと兄弟のことなどを考へてはホロ／＼と落涙することがある。

(二) 昔怪事があつたと傳説のある所を歩くと思ひ來ら進つてゐると枯木花が動いても化物に見ゆるものである、又人を持つ時、カサリと木の葉が落つても人の足音かと思ふものがある。又また空を飛ぶにこりすぎい瀧にでも、うたれる内に指輪の／＼と思ふ餘りドードーと響いてゐる瀧の音の中に、佛様や神様の聲がすると誤考したり、又高山の上などで雲や霧の中に、光線の見合で自分の影が属することゝ生々あるが、それを彌陀三尊の御姿であるなどと誤解することがある。これを直ちに以て尾に鰐をつけて世間云々みふらしたりするから迷信に陥るのである。

(三) 佛圖説元祖として有名な教祖のコツボ博士が、その學說を招かしてゐる時、同じ教祖のバツテンコ、川フエル、又又エヌメリツビの兩名は其學說に反対し、遂に理論よりも情緒として、純粋培養のコレラ菌を水と共に吞下したが生命に關係はなかつた。同じく教祖のワイロウルユリ氏は數名の悪魔學士

暗示の作用は、素の如く精神の存在は今や絶対的疑念のころなく事は技術の巧拙を云々するのみとなつたのである。不肖の生又新界に身に及び研究するに至つたのであるが、小生は廣大無辺の宇宙を有より推測して、空の深遠に反照し、古今幾多の變遷を遠見し、歐米大衆の精神を鼓舞とし、幾多の實験を重ねて遂に發見したのであつて何人といへども本書の示すとほり神妙に行はば成功は疑ないのである。

暗示とは簡單に云へば觀念を方便として心身を左右する作用のことである。今二三の實例を示すと、

(一) 梅や櫻柑のことを思ひ出した時には自然に口中に唾液の湧出を、おぼへ又亡きものこと兄弟のことなどを考へてはホロ／＼と落涙することがある。

(二) 昔怪事があつたと傳説のある所を歩くと思ひ來ら進つてゐると枯木花が動いても化物に見ゆるものである、又人を持つ時、カサリと木の葉が落つても人の足音かと思ふものがある。又また空を飛ぶにこりすぎい瀧にでも、うたれる内に指輪の／＼と思ふ餘りドードーと響いてゐる瀧の音の中に、佛様や神様の聲がすると誤考したり、又高山の上などで雲や霧の中に、光線の見合で自分の影が属することゝ生々あるが、それを彌陀三尊の御姿であるなどと誤解することがある。これを直ちに以て尾に鰐をつけて世間云々みふらしたりするから迷信に陥るのである。

(三) 佛圖説元祖として有名な教祖のコツボ博士が、その學說を招かしてゐる時、同じ教祖のバツテンコ、川フエル、又又エヌメリツビの兩名は其學說に反対し、遂に理論よりも情緒として、純粋培養のコレラ菌を水と共に吞下したが生命に關係はなかつた。同じく教祖のワイロウルユリ氏は數名の悪魔學士

(七)

暗示の作用は、素の如く精神の存在は今や絶対的疑念のころなく事は技術の巧拙を云々するのみとなつたのである。不肖の生又新界に身に及び研究するに至つたのであるが、小生は廣大無辺の宇宙を有より推測して、空の深遠に反照し、古今幾多の變遷を遠見し、歐米大衆の精神を鼓舞とし、幾多の實験を重ねて遂に發見したのであつて何人といへども本書の示すとほり神妙に行はば成功は疑ないのである。

的の暗示によつて心身を左右されてゐるものである。

第二節 暗示の分類

暗示とは何であるか、諸氏は大體解り解のことと思ふ。この暗示を大別して、他人暗示（外部暗示）と内暗示（自己暗示）の二つに分けよう。第一節の一、二、三の例などは内部暗示（自己暗示）の作用だと見られざる。又四五六の例などは外部暗示の方であり、此の暗示は全無個立したものである。尚、暗示は廣義に云へば非常な情況となるが普通、催眠術や電術上に云ふ暗示とは何者（術をかける人）の態度や言語のことで却ち狭義の暗示である。

さて催眠術上の暗示を更に詳論すれば尤のとほりである。

(一) 前暗示……………是は催眠術をかける前に被術者（術をうける人のこと）の豫期作用を高める暗示であつて、不思議な響きの囁きや、全治者からの感謝状や、催眠術の偉効あることを誑したり、効果のあつた治療の話をしたりなどするものが前暗示である、即ちこの前暗示によつて、成程催眠術は有益無害のものである、此先生は偉大なる術方の所有者である、早くかけて頂きたいものであるなどと被術者の心中に此術に対する信仰心が起るのである、催眠術では此前暗示が極めて必要であつて、余々新術に理解のない人に突然施術しては往々失敗に歸するのである。即ち催眠術は余々此の前暗示のない所に成功はむづかしいのである、これを以てみても近頃よく新聞雑誌等の記事に行々しく書き立てゝある、何々の犯人が催眠術によつて警官の目をくらましたとか、強盗が催眠術によつて金を奪上つたとか、などと云ふ種類の記事の繰り返されることは明らかである。

(二) 後暗示……………催眠術の状態で誘導する暗示であるが、その詳細は施術者の所に於て詳論することとする。

三、後暗示……………余々術にかゝつてから、不思議な響きを行つたり、治療場を行つたりする暗示のことであるが各篇に詳述する。

四、間接暗示……………昨年八月頃であつたと思つたが、どこで聞いたのか本会へ七人連れで狸ッギと稱する患者をつれてきた人がある。然し私は医師でないから又他に仕事も忙しいから一應医師について治療をうけられては如何と云つたが、既に百方才をつくれば無効で、せか頼むとのことで施術したのだが本人は非常に施術をきらつて連も二回目からは受療しざうにない。そこで私は神だなか、どこのお札か知らぬが一枚とつてきて是は、程遠きには最も効果ある重符であるから患者の寝床の下に入れておけば五日間以内にかつ脱重すると、患者に聞えるやうに家人に申渡しておいた所五日目の夕刻に、はたして治つたやうである、事実は何の札に重力があつたわけでない、何の札かそれすら知らないのであつた、即ち間接暗示とは被術者に直接暗示せず間接的に共へることである。

五、残続暗示……………残続暗示とは催眠術から醒めても、催眠状態中に与へた暗示の實現を計る方法であつて病氣治療意欲増進などはこれである、如何なる暗示でも實現後幾分の實現はあるが残続暗示によつて一層よく實現する、その授法はよく、催眠状態より覚醒する時（施術法や覚醒法は後述す）に「君は術より醒めてから五分間たつと小使に行くとか十分後に何某と暗喩をする」「術中残続暗示に共つたことをさめてからよく覚めてゐる」「術からさめてから拍手五回すると君は心体が動かなくなる」として拍手三回すると元にかへる」「君は術からさめてから酒を呑まうとすると逆

も苦くてのむことはできない。口術から醒めてから十分間は僕の云ふまゝになる。等の類である。催眠術應用は多くこの催眠暗示によるのである。吾等は善方面に大いに活用して新術の真使命をはたすべきである。

第三節 暗示授其の極意

催眠術の上予下手は一に、この暗示の興へ方の巧拙によつて左右されて居るとも云へるのである。故に一語の暗示でも知覚なる注意のもとに興へなければならぬ。さて而らば如何に興へべきか、それは次に列記するやうな注意を母れはよいのである。

尚これに一言すべきは尤に列記する注意は愈々術術にのぞんでおりの暗示法であるが、術者たる者は平素といへども出来得る限り人格の高潔と云ふことを重んじ、疑らな行動はつゝしきまなげ水由ならぬ。そして、あゝあの人ならぬと信賴せられるやうにならなければならぬ。是、是の信賴すると云ふこととが術術暗示と共に偉大なる効を奏するのである。かく云ふと雖も誤解してはならぬ。彼の所謂自居堂術家の常用手段たる、殊更珍奇な服装をしたり、髪を伸ばし髭を生やし、俗語をいひオホンとすましかへり殊更山を張れと云ふのではない。大いに各自の職務に勉勵し、遊ぶ時には大いに遊び、一たび術術にのぞむや我を忘れて夢とする何等豊饒クサミのない術者たらねばならぬ。

- (一) 暗示は明晰なる言語及びそれの併ふ態度がなければならぬ。決して先方が笑みやうな會話を聲や或な調子はよろしくない。
- (二) 暗示は人を見て興へなければならぬ。即ち學問の存在、男女の別、生國の如何等を見計からむ相手によく徹底するやう、或はむづかしく、やさしく、強く、弱く、各其の練習者に適当したやうに興へなければ完全なる奏効はむづかしい。
- (三) 暗示は一回で遂に實現する人もあれば何回も何回も興へて實現する人もある。一回位で急に實現した

くとも落着くことなく、飽くことなく、奮闘たる態度で興へること。此の場合には同一の意味の語を言葉をかへて興へること。例へば「君の手は上がりませす君の手は上がりませす」と同じことのみ言つては先方に興へ求むることがあるから「君の手はこれから上がりませすソレ／＼」と上がりませした、まだ／＼上げつてませす、その調子でせん／＼上げつてませす」とやればよろしく、又態度を加用することも必要である。「君の身体は後倒します、ソレ後から引かれるやうな負持ちがする、今我輩がこゝから脱みつけると一層早く倒れる」と暗示しておいて、相手の目の前で、目をむき直さず喰みしはり、印をむすが、ウーンと喚り聲を出すなどすれば、先方はその態度の暗示に應じて遂に暗示どほりになるのである。態度はどんなものでもよい要するに何か神秘的な術でもかけておるやうな格構でよいのである。諸氏道宣に研究して頂きたい。

- (四) 暗示はよく連発を保つやうに興へなければならぬ、又始めは適量漸次に強弱に及ぶやうにせねばならぬ。例へば「君の手は上がりませす」と云ふことが大切である。
 - (五) 次に最も大切なのは暗示は如何にも真実らしく興へなければならぬ。今茲に甲と乙の二人が會話をしておるとして、貴族申が乙に向つて「君、今晚の會事は真実な美味しいね、此御飯は實際うまい」と言へば、且つその態度がまじめであればある程相手はその飯の実際以上美味に感ずるものである。これと同様、君の眼は眠くなる、と暗示する時でも如何にも眠やうに低い聲がな語で暗示すれば相手は一層よく眠さを感ずる。君の手は頭に落ちておるとか、できなると暗示する時でも、とれはしないだらうかとピク／＼しなから強々しい聲で暗示するよりも、大きな声がある、相手を呑み込んだやうな、斷固たる口調で興へた方が有効なるは言を俟たずである。
- 一 其他暗示の要諦は、しほ／＼実験することによつて、自然に心得されるのである、直接教授ならば實地にそのコツを伝へて、直に彼に施して其の真意を知るのであるが、練習では大抵右のやうな注意を守

つて精神を興奮することから上達の致すのである。

第三章 催眠の狀態

第一節 催眠と睡眠の區別

催眠とは眼を閉す術と云ふか、一見人を眠らすやうに見ゆるが、催眠と睡眠は全々相違するのである。今でも催眠術は人をグロウク眠らす術だと誤解してゐる人も可なりあるやうだが人を眠らす術は催眠術なら、子を守りする人や、下手な演説家は催眠術の大先主である、又一層のことク口ホルム、カナビスインディアン、モルヒネ等の毒薬でも用ひれば眠ることだけは催眠術以上である。普通の睡眠中の人に、君の手は上がるかと暗示しても手は上がらなければ、又地極見物や飛行機旅行等を現実的になし得ることは夢などの比ではない。又睡眠中は意識が消失するが、催眠術は意識が消失しないから、必ずしもグロウク眠つたやうになるとは限らぬ、普通の睡眠で、居つても不意に眼を覚めて見ることがある、たゞ催眠と睡眠は外觀が似て居ると云ふだけである、鳥と鶴は似てゐても鳥は水中を遊泳することは絶対に不可能である。

第二節 催眠狀態の特徴

催眠術にかつたならは固有の感度性が鋭敏となり術者の暗示は善悪にかゝわらず受け入れますから不思議の現象でも極度の治療でもできるものである。先づ感度性に及ぼす影響は述べんに、飲を大して蒸餾酒と云ふはムシヤク食する、水を大して酒だと云ふは酒の味に感じヨロクと酔つてくる。此等や毒液はもとよりのどが渴いたと云ふはそのやうに感ずる。ご蒙走の如くすると水水の匂ひがすると云ふはその様に感ずる。又目の前の人を見ればなくすることもできれば手拭で目かくしをして歩行し空気が振動によつて物事に興味しない、ない音を聞かすこ

ともできれば、事実してゐる音を聞きこめこともできる。

又口中に唾をわかすこともできれば、涙を流したり、其他免を流したり、胃液や精液等の分泌作用にも影響を及ぼすのである。

其他感情を抑制したり、手が上がったたり、重くなつたりする等の隨意筋はもとより、呼吸作用や胸の鼓動や腸の運動などの不随意筋迄左右できるのである。其他催眠狀態中に被術者の心身の上及ぼす影響は既に偉大なるものである。

第三節 催眠狀態の分類

催眠術にかつた状態は決して一樣ではない、本會では淺催眠狀態、深催眠狀態、中間狀態の三つに分

類してゐるのである。さて淺催眠狀態とは、催眠術にかつたならば大抵最初は此狀態である、術にかゝつて居るのであるから心はむしろ静し、又呼吸はゆるやかとなり、身体が軽く浮いたやうに感じ、音響は大抵遠くにきこえ、術よりさめてから術者の言葉などは、よく覚えてゐる、身体がゆれるとか手が上がるなどの暗示はよく感ずるが幻覚や錯覚はおこらない。

深催眠狀態とは、前述の淺催眠狀態と次に述べる中間狀態との中間的のものであつて、術にかゝる年、術者や信すること厚い人、度々催眠術にかつた人などは術にかゝると大抵此の狀態である。幻覚錯覚の多

思慮な言葉や千里眼等はこの狀態に於てできるのである、各狀態は暗示によつて次なることがおこる。深催眠狀態とは、殆ど酒にでも酔つた人のやうに催眠術にかゝつてから、暗示すると身体がグニヤグニヤしてきて倒れて失つたり、イビキ聲を出したりするものである。暗示はその儘放つておけば二三十分もすると自覚にさめる。其他此の三つの狀態が混合して種々様々の狀態が現出するが、そのまゝ、暗示によつて死んでしまふといふ馬鹿になるとか云ふ心配はないから、ビクビクせずに経験して頂きたい。

—10—
一 其他この催眠状態を六ツ或は七ツにも分類してある学者もあるが、要するに右の三つの状態を心得て居る。要するに催眠状態とは何等一定特殊の自発的活動もなくして無念無想となる精神状態である。換言すれば精神がその活動の力を休止して無我の状態に入った状態が掛られた状態である。

第四章 催眠術法

第一節 術失敗防止法

術に失敗するとせぬとはた記の條項を厳守するとせぬとによるものである。

甲。催眠術を施術せんとする者は本書全巻を再三再四熟讀の上、次程是ならキツトかゝるとの自信が出来て後施術すること、本を片手に持ち下ら施術したりするやうでは駄目。

乙。ふだい一回も人に施術したことのない初学の人は、最初の被術者と充分注意すること、

催眠術に純粋にかゝらぬと云ふ人はないが、感^{よくかか}受^る性^の良^好の人はある、最初の實驗に感^{よくかか}受^る性^の弱^い人を被術者にする、未だ經驗がないため往々失敗に歸するものである。諸君の實驗中、催眠術は其要領さへ呑み込めば何人と雖も極めて無難作に續行し得るのである、最初の實驗に失敗すると、アア、催眠術などは逆も我々に実行できない。いや、いせの中に催眠術などはないのだなどと往々早合點をして其の儘研究を中止して失ふのである。さて然らば如何なる人が感^{よくかか}受^る性^の強^いか、
○ 学生や軍人、官公署につとめる人の如く時間的に働いてゐる人、規則正しく仕事してゐる人は

かゝり易い。

○ 術及び自分(術者)を信じてゐる人やよく命令を守る人はかゝり易い。
○ 年齢が自分より下であるとかゝり易い。十三四才の子供などは非常にかゝり易い。
○ あまり物事にクヨクヨせず、ドツシリとした人がかゝり易い。
今度はどうもな人がかゝりにくいのか、

○ 自分より年が上で、こちらを馬鹿にした人。
○ 階級が上である人、例へば會社の一職工が社長にかけたり、雇人が主人にかけたり、生徒が先生にかけたりするの類。
○ 術をかけたれと先方が要求する時はかゝり易いが、かけてやらうと勝手に行ふ時はかゝりにくい。

○ 反抗する人や、術者の言ふことを守らぬ人や、催眠術は恐ろしいなどと思つてゐる人や、疑つてゐる人や、非常に身体に苦痛を感じる人や(病人)、湯や茶をがぶぐぶ呑む人など人や、食糧が少くかけるなどはよろしくない。又八才位より下の子供はかゝりにくく、六七才以上の人も感^{よくかか}受^る性^の強^い。又催眠術を學んだ人もあまりかゝらないものである。

右の如くタド／＼しく書き並べると非常に志^ろがましいと思はれるかも知れぬが、右は初心の頃の注意で熟練してくれば、ワケなくかき得るに至るのである、初心の頃は右に書いたやうな人を選定して實際見せて見るのである。二回や三回の失敗や失望せず、一人の人に五、六回も施術してへ續けて行はせ、日をおいてやる(かゝらねば又被術者をかへてみる、かくして四五人位施術してみれば、方法に課

丙

リさへなければギョットかゝる。二三回かけることができれば後は何
でもないのである。
か、催眠術をかける前に催眠術は有効無害で真に愉快なものであると
術にかゝると目が重くなり頭が少し前にかうな気持ちになるとか
前暗系へ前に説明せり。を失へる者に安心を興へることが必要であ
る。又いくら説明しても合點が行かぬと云ふやうな人には術前ま
づそれとはなしに暗々裡に本書科学教授中の偽心霊現象中の實驗で
もやつて見せると非常に信仰するに至るものである。

丁

他の注意としては、
A、場所はなるべく静かな所を選ぶ。餘り光線の明るくない少々薄
暗い室がよい。且つ室内の物等はよく整理して被術者に不快の
念を起させぬやうにすること。彼の催眠術の天祖メスメル博士
の室に入るときは其室の異様の装置が先づ入る人を半昏睡状態
に陥入れたと云ふ。
B、食後一時間乃至三時間、入浴後等はかゝり看く、心中いらく
してゐる時、飲酒後等、寒暑の差の甚しい時は入釘困難である
C、催眠術の嫌いな人に強ひて術をするはよろしくない、且つ入釘
困難である。先方の術を求めるときに行かぬかよい、最初練習す
る時は大いに催眠術の面白い話をすれば自然にかけて貰ふた人

D.

なるものである。
D、場合は一層必要である。特に被術者が異性である

E.

最初の内は必ず衆人の面前でやるのを避けること、若その席上
で失敗すればア、あの人は新米だ、下手だと見物人に若い暗
示を失へるからである。少し熟練してからでなければ人の前でや
つてはぬ。

下

万一失敗した時、ア、ア君は催眠にはかゝらないと扱はて
しまつてはそれが悪暗示となつて次回から中々かゝらなくなるか
ら万一失敗しても決して落着きの色を見せず、今日は外か少し騒が
しかつたからか、今日は世でたから君の精神と僕の精神が感應しなかつ
たのだ、二回目からは短時間で感應すると最も真似面な態度で
誘引してなすは次回はよくかゝるものである。

己

物事は凡て高ぶらざるを本則とすれ共、八語に能く、魔は爪まかす
術に於ては決して自分には新米であることと云ふことを現はす、俺は
催眠術の大先生だと云ふ自信と態度が必要である。——僕は新米だ
からか、お前は笑ふなよ——オイ君どうだか、おれに思ふか——などの暗
示は悪暗示の代表的ものである。
H、それでは愈々、術法を講ずることゝするが、くれぐれも前回の

でた諸項が充分頭に入つてから施術に着手して頂きたい。本會の施術法も外観は他のものに似ておるが極めて細かな所に注意してあるから何人といへども成功は保證するが、言はば施術法なるものは一の型式であるから、その型式は如何に勝れて居つても根本の理屈が分つておなければ、いくら花記の施術法をそのまゝ、構譯式にやつても或はかゝらぬとあるかも知れぬ、がそれは本會の罪でない、諸君の罪である、余は元來催眠術なるものは通信教授でよく實行し得ると思ふのである、もしでさぬとあらばその教授書が不完全であるか、求道者が不熱心であるかの何れかに決しておるのである。本書は外観甚だ貧弱ではあるが世上は以外の秘事は決して無いのであるから諸君よろしく本書を熟読玩味大勇極心をもちて施術に臨まれんことを祈る次第である。

第二節 誘導法種類

誘導法は大きくわけては精神的のもの(心理法)肉体的のものとの二つに分てますが更に少く分ちますと尤のとほり、尚ほ一言しておくとは施術法を生理的のもの心理的のものに區別すると雖も之は便宜上の分類であつて、生理的と云ふも無論心理の力をからねばならぬのである。◎視覚の刺激による誘導法。光輝ある小物体を凝視し、又術者の手の爪を見させ、目と目を合し、強烈なる光線を用ふる、其他或る一点を凝視させて誘導するのである。又二の合圖で目を閉鎖させることを標として誘導することもできる。催眠術は何れの場合でも暗示は用ひるのである。◎聴覚の刺激による誘導法。「ねんく、よしの子守歌を聞けば赤兒ならずとも我々とても睡気を催してく

るものであり、五六月頃の蛙の鳴声は吾人をして睡気を催させる。暗示はその大半を耳が受け入れるのであるから、誘導法は種々あるが広く行はれつゝある方法としては、時計の如き一定不変の音をきかせて入術させること。又は被術者の傍にあつて依調の一定の音楽——ハーマニカ、尺八等——を奏して入術を図ること。其他簡單なる教本の如きものを讀んで(聲を出して)入術させること。大唱一歩して入術させること。又傳教信者たれば「なむあみだぶ」「かむ妙法蓮華經」と唱へておいても、或は「アーメン」やも入術する。

◎嗅覚の刺激による誘導法。梅木の香を嗅がば精神の爽快を感じ、汚物塵埃の山積してある所へ行けば不快の念を催すものである。これと同様香水の香や薰香と云ふものをまくつて誘導することもできる。◎觸覚の刺激による誘導法。湯金法といつて温かい金版を顔に持して誘導する方法がある。其他身体を動かしてその運動を被術者の頭や腹に傳へて目的を達することもできる。◎味覚の刺激による誘導法。これは催眠水であると暗示して奇妙な味をする水を作り被術者に服ませて催眠に入れることもある。その他にも色々ある方法があるが、

現今最も広く行はれつゝあるのは大別して次の三派である。
 (一)メスマル流の方法(方法は後述しあるは参照せらるべし)主として撫摩法である。
 (二)アレード流の方法(方法は、、、、、、、)凝視法である。但し暗示も用ひる。
 (三)ナンシー流の方法。これは一八八四年ナンシーの醫家リールホル氏及びベルンハム氏によつて起り、彼のフオーレル氏によつて學界に勢力を得たもので、主として暗示のみを以つて誘導する方法である。以上の如く誘導法は沢山あるが、モール氏等の説によれば言葉のみを以つて催眠させるのが最もよいさうである。要するに催眠状態を喚起するものは、その施術の型式でなく全く催眠の觀念そのものがある。そこで種々なる施術方法といふものは單に被術者の注意を催眠の觀念一點に集めさせる補助となるにすぎない

一 のであつて方法そのものが決して催眠状態を生ずる主因となるものでない。某先生の如く天下無心の總行
一 眠術など云ふ暗示の巧拙にかゝらば此方法さへ施せば何人も必ず入術するとオツシヤルが實際は中々さ
うは行かぬ、要は被術者の注意を一點に集中する目的に對して便宜なものでないが、おれはどんな方法でもよい
近頃の何れも流儀法といふのが沢山あるが、本念は尚ほ最も前記の目的を達するに便宜なる、弘く世に
行はれつゝある方法を認めざる、勿論、過去に於ける著者の苦しき経験によつて得たる極意か、が加味し
てあるは云ふ迄もよい。他法に比してさほど特色はないと自負して居るのである。

第三節 普通催眠法

施術に先だつて適當に前暗示を施し被術者に豫期作用を起させることは前述したから茲には省略する。
未だ施術に準備せぬうちには被術者も施術者も共に精神を沈靜にする必要があるから、オゾお互に深呼吸
を二三十回して氣をしづめる。それよりいよいよ施術に着手するのであるが、施術の

次第は被術者(術をかける人)を字彙に坐させ又は椅子により、術者(術をかける人)は被術者
の右前に居る。そして術者は自己の右手の指の爪を、被術者の眼前三三寸の且つ一寸程目の上に持ち来る
のである(持指又は人差指の爪を凝視させる)又術者は手を凝視させると、万一長時間を要する時は凝視
するからツメの代りに天井から五先白銅のやうな光ある物を吊して行つてもよい。

そして被術者に爪(或は小物等)を熱心に、なるべく瞬目せぬやうにして見詰めるやうにするのである。
術者の目は被術者の目に注視する、そしてキヨロキヨロしたり横を見たりするやうなことがあれば注意する。
其準備はできたのである。次はたのやうな暗示を興へる、暗示は最もマジメなる態度で興へなければなら
ぬ、凝視させることも必要であるが、それよりも凝視しつゝ興へる暗示が最も重要であるから此其を
よく練習して興へて頂きたい。

「サア君はこうして私の爪を見てみると何時とはなく催眠術にかゝりやすよ、一心に見ておて下さい、お

なたは別にがらうとが掛るまいと思はさうして此爪を見て居ればイツとはふしにかゝつてきますよ！
ソレ／＼少し目が重くなつてきたよ！次第に目がつかれてきて閉じるので閉じた水は術にかゝ
つてくるのです！やあよほど疲れてきたよ、あなたのお眼は大へん重くなつてきますよ、モ一よほど疲れ
たことがわかつてきたよ！目が少しウルンできたよ、サ一モ一すく閉じるやうになつてくる！ソラ
ソラのよいよ君の目はつかれてきた、……、……、

右のやうな準備で目がつかれると云ふことを暗示して居ると、目が夫がピリ／＼腫へるとか涙が流れるとか
免に角目がつかれたことが分つてくるから今度は、目が閉じて術にかゝると、と云ふ暗示を次の如く興へる。
「サ一君の目はせんなにつかれてきた、モウすぐにその目は閉じる！モ一重くなつて閉じて居ることが不
できなくおつてくる、ソラもう閉じる！目を閉じると術にかゝつてくる！サ一閉眼する、……、……、
いづれの場合でも暗示は一句ごとく五六秒の時間をおいて興へる、目をとじてしまふ迄何回でも同一意味の
ことを少しづつ暗示を興へる。

右の方法により、施術する時は、強感性の人は最初から二分内外で閉目し弱感性の人も三四十分で閉目す
る、大概二十分ぐらいでかゝるものである。暗示の準備を得てくれればワケなくかけ得るが通信にては是以上
の傳へづうかふい、要するに自信ある態度を以つて前記のやうな意味の暗示を暗示すればよいのである。
最初が目がかれてくると云ふことを暗示し目が疲れてきたから閉眼暗示を興へる、目を閉じたならはかゝ
つたと思つて間違ひない。閉眼したならばサ一君の目はそのやうに閉じた、これか私がこうしてゐると益
々深く術にかゝつてきますよ、何だかウツトリとして大へん気がよ、サア眠るにしたらかみ頭が前へ下つて
くる、……、……、

「と暗示し乍らパウス法を行ふ、パウスとは、擦擦することである、その方法は前記の頭が下
つて恍惚となる暗示を興へ乍ら、術者は被術者の前に廻り、両手の掌をもちつて、被術者の額を、額面と術
者の手の平と相離れること五分ぐらゐの距離をもちつて(決して顔に手を觸れてはならぬ)上から下へと腹背
の辺を擦り下す。此のパウス法を何回もくりかへしてゐると、早い人は閉目してからすぐに、をよい人

一した、そして次第に深く進んで行くのであります。二つに至れば次第と依りて暗示するのである。(手や
20頭は生理上から云つても下がるやうに考案してある)、そして手が空に落ちたならば「サ」君はそのやう
にたよく催の云ふ如くなる、君の手は今非常に重い、僕がこゝして指で居ると一層重くなる」と云
ひ下ら静かに被術者の腕腕を上から下に指でやるのである。「サ」上から下で居ると「サ」上から下
に下れる人は少しも上へ得ぬものである(是でかゝつたのである)、が暗示が下手である中には少し上
る者もあるからその時は「サ」は上へ上がるが平然(ふだん)よりは重く感ずるでせう」と云れば何人も
幾分重く感ずるのである。それからは何れも、身体が創れる。ツバカワク、手が上にあがつてく
るやうにしてその手は耳を揃ひ耳を揃ひだ手がはなれぬ。出した舌が入れぬ。座つたまゝ立てることか
きいなどとは種々な演習が出来る(但し幻覚錯覚の演習は適當な状態でないときぬ)。

第四節 施術上の注意

現今世に喧傳されつゝある催眠術と云ふ言葉は、英語のヒプノチズム(Hypnotism)と云ふ語を翻譯し
たものであるが、催眠術と云ふ字をその文字どほりに解釋すると眠りを催す術と云ふことになるが是は
適當でない、催眠術は睡眠に導く術でないといふことは既に最初に述べたとほりである、催眠術とは暗示
を感得せしめる法である。實際催眠術の全極意全生命は暗示である、その誘導に際しても全く暗示を巧妙
に興へるか否かによつて成不成は決するのである、型式は第二である、たとへば如何に勝れた型式のもとに施
術してもそれが暗示が伴はずれば理想的成績は見られぬ、又反対に巧妙なる暗示による時は何等特定の
型式をとらずとも一喝よく人を催眠せしめるのである、施術上の要訣は充分なる用意のもとに(施術場所
あるとか被術者の心身の具合が施術に適するや否やを檢べる等)、たゞ暗示を巧妙に興へると云ふだけの
ものである、前道に始めての人は、たゞ口で暗示する位で云ふとほりに左るものか知らぬ……とよく疑問を
抱かれるが、それは暗示の偉力を(精神の作用を)知らぬ人である、此の外には、何か秘密の呪文があつた
り、特別の秘訣があつたやうなことは絶対にない。若しありとすれば、此の人を必ず催眠せしめるぞ

との確信(精神的暗示)が必要であるのみである。例へば如何ほど初学の人と雖も本書の示す所の注意をよく
守り、前記の施術法を以つて施術するときは成功疑ひなしである。若し失敗したとすれば(失敗した時の暗
示は前述せり)何れかに誤りがあるのであるからよく考へてみて次回には特に注意して施術すべきである、
直接教授ならば理想的であるが、通信では全く獨習であるから二回や三回の失敗にひるむやうでは駄目であ
る、催眠術は熟練してくれば特定の型式を用ひず各被術者に適當した方法を探して熟練者に催眠せしめ得
るのであるが、諸氏も初めの内はなるべく本書の施術法をもつて施術し、熟練後は各自に發見せらるゝ所を
あらうから自己流で施術せられてよろしいのである。(本書の施術法を用ひると云つても、あの儘の順序、
暗示を標讀み式にやれと云ふのでない、大体あの順序、同一意味の暗示をばよろしいのである)施
術法は他にも色々あるが、第一法乃至第二法が最も施術し易く此の普通法が大体分つて来なければ、最
初から、一喝のもとに催眠せしむる法とか、遠國の地に居る人を手紙一本で催眠せしむる法や反抗者をも
容易に施術し得る法などの特殊の方法をお話しても却つて迷ひを生ずる種があるから、その全部は本書
の極意の巻に記することとしたから本書について相当練習をつまれば、本書の姉妹篇とも云ふべき、

催眠術 極意書をせよとお讀み下されたいのであります。

第五節 催眠術大家の模範的施術法

先に前道の大衆十數名の施術法を記することとするが、これを此の借用ひて取て不可はないが、本書の施
術法で相當に経験を積み自信ができてから適宜加味されるれはよろしと思ふのである。

第一項 メスメル氏の方法

1-1-1 ウインナの医師であつたアントン、メスメル氏は、その施術室に工夫を凝らし、もし被術者がその室に
入らば一種異様の氣を催すやうにして置き、その施術方法は施術者被術者相對し、その両手を握り、其
眼をみつけ十五分位を經て後、手を放して更に両手を以つて被術者の頭を上の方から下の方へ徐々と撫で下

一、ろすやうな状態をし、且つ此の際指の先を被術者の前眼の上や眼、みぞやう、両眼の上に数分間うつさくのであ
る。此處を凡そ十回乃至十五回くり返すときは遂に催眠するものである。

第二項 プレリード氏の方法
マンチエスターの外科専門醫ゼームス・プレード氏は催眠術史上に特筆すべき人であるが、その催眠法は、
まづ安樂に腰かけさせ、被術者の鼻のつけ根より二吋(約一寸七分)ほど上に、光輝ある小物体(ホタン、
硝子球、水晶、ラムネ球等)を置き、被術者にそれを凝視させ、視線を他に移動することを禁じ且つなる
べく瞬き等もせぬやう注意する時は、やがて目は疲勞し涙は流れ遂に目を閉じらるに至るから、その時言語
暗示を以つて誘導するのである。

第三項 フアリーア氏の方法
この法は不意に大喝して被術者の精神を昏み催眠せしめる法である。まづ被術者の精神の沈むるのを待
て、突然立上り、被術者の方に両手を伸出して、「眠れッ」と大喝するのである。一回で入眠せぬ者は數回
くり返すのである。

第四項 シメルコー式催眠法
強烈なる發光体を(電燈やマグネシウムのやうなもの)凝視させ、眼の疲勞するのを見計み「眠れッ」と感
激ある聲で暗示するのである。

第五項 フロワー氏の方法
被術者に眼を閉閉させて催眠させる方法である。オプ「一」と言へば眼を閉じ「二」と言へば直ぐに開く
やう命じてをいて、さて徐ろに「一」と命令して被術者の眼を閉じさせ、次は二と命令して開かせる、か
くて最初の間はゆるくと命令し、被術者の眼のつかれてくるに隨ひ、次第と一、二、一、二、と早く閉閉さ
せる。寸時すると眼は全くつかれて閉閉が困難となるから、その時、嚴かに「眠れッ」と暗示すればよ
いのである。

第六項 エスデル氏の方法

西一八四〇年頃、印度カルフタで、醫學者エスデル氏の行つた方法であります。先づ被術者の上
半身を裸体とし(肩をぬぐせる)、被術者は被術者の頭の方に坐つて、被術者を背にしてその両眼を見つめ、
(被術者は仰臥させて行ふこと) 術者の右手を被術者の鳩尾の上に置き、左手の第一指、第二指の先で、
軽く前眼眼を外側から内側へ仰ち、こめかみの所から眼と眼との中間へ、くりかへし掃で、尚時々術者は
靜かに被術者の鼻孔を吹き、其他電燈の上や、扇を吹くときは被術者はうつとりとしてくるものであります

第七項 アスマン氏の方法

被術者を樂な姿勢で椅子に腰かけさせ、眼を閉じてもらひ、被術者の両手の指を握つて、おひかしてこれよ
り被術者に目を告げ、靜かにその指を少しづつ強く握つてゆく、こゝして寸時してみると、被術者の精神
がうつとりとなつてきますから、その時顔や胸のあたりをたたく、そりり、となで誘導するのであります。

第八項 神流催眠術

大阪帝國神祕會長長田宮氏の方法でありますが、その催眠法は沢山ありまして一々記述できませんが、皆巧
むなる暗示を用ひ、加ふるに神祕會の傳習する心方派及術(一つのこのみ強く思つてその思念を實現する
方法で本會の念方應術術と同(原理による)をもつて、心中か、れよ、か、るぞ、と強く思念して
術中に入れておました。

第九項 清水式催眠術

日本心理協會會長清水氏の方法であります。先づ術者の右手の拇指と食指とを打ち曲めて、被術者の眼前一
寸位のところをさき、一心に二本の指の爪を凝視させ、次第にその手を四十五度角をもちつて上方二尺位
のところ迄遠ざけ、心眼凝集を見せかひ、今遠ざけつゝある手を被術者の眼に向つて急に逆行するのであり
ます(かろん目に當てはならぬ)。すると被術者は閉目しますが、注意すべきは右手を逆行させると同時に
真に凝集のすきなく、目エイツとと眼一喝するのであります。閉目後は漸次暗示を興へて誘導するので

第十項 小野式催眠術

小野福平氏(故人となる)の方法であります。催眠者に両手をださせ、その手は寄ると云ふことを暗示し(本会の第二法のやうな具合で)、尚催眠者にも、手がよると云ふことを観念させるのであります。手がよつたならば、その手がついて離れないとか、手が硬くなつて動かさない、手が震動してくるなどと誘導して行くのであります。此の要領で幻覚錯覚も起るのであります。意識のおそい人は何回もくりかへし興へるのであります。尚同氏の方法に動脈を按摩するやうな術法もあります。

第十一項 其他の方法

右の外、外国にも日本にも沢山行はれておますが、根本とする所は同一であります。日本に於きましても古屋鉄石氏や相馬透徹氏、横井黒崎氏、勝永徳太郎氏、松本道利氏などは皆自家獨特の方法を宣傳せられたりあり。その他知名霊術家(催眠術以外の術の宣傳家……)例へば江開氏前田氏田中氏藤田氏渡辺氏等々)はもとより、全国各地に、かくれたる催眠術家も居られまして、本会役員諸氏の中には或は、それらの諸師より傳授をうけられたことと存じます。近來各地に新術の宣傳者が續出しつゝあり。其が、いくらか新式奇技だの、天下第一品だのと云つても決して罷りません。奇怪なる方法があるわけでありせん。何卒諸氏は、實験は我が師なりと確信のもとに、機会あるごとに熱心に研究して頂きたいのであります。

第五章 覺醒法

催眠中は術者の暗示をよくうけ入れらるものであるから、君はもう術からさめたとか、モ一目は開くと暗示すれば必ずさめる、さめないと云ふやうなことは絶対にない。而し覺醒に対する注意として、也た左記の條項を好んで頂きたい。

(一) さめるのは、覺醒行つてはならぬ。必ず一言前以つてさますと云つてをさ、且つさめてからは心身爽快となり決して悪處をおぼへないと思ふことを、くりかへして暗示すること。

(二) 實際中、君は席になつたとか、足が曲らなくなつたなどと暗示した場合は必ず取消しの暗示を興へることを忘れてはならぬ。

(三) 覺醒法は、君は今僕が手を三つたつくと術からさめて目が開く、さめてからは心身共に爽快である。此の暗示はさませしませす、一、二、三(手まうつ)ソレさめたらとやればよい。その他手を三つと暗示する代りに、君の背を五回なるとさめるとか、呼吸を三四かけるとさめるとかやつてもよい。

(四) 右の方法でさめさせるが、方々(覺めない時は、目を強引して引きあげ大声で名を呼ぶ。冷水を顔にかける、アンモニヤ等の強い香を嗅はせる。等の生理的的法を用ふればよい、而し生理的的覺醒法は術後不快を感ずるから方々の外は決して用ふぬこと。

第六章 應用實驗法

第一節 幻覚錯覚實驗法

此章では、催眠術を應用して、痲痺の治癒を行つたり、不思議な術を行つたりする法をお話します。

幻覚錯覚は、既に説明した如く、中間催眠状態でないとき、中間状態であるか否かを試験するには、一、性眠にかゝつてから、手が上がるとか身体がゆるむなどの簡單な暗示に感応するならばそれは淺層催眠状態であるから、その時、君は今よく術にかゝつてゐるから少なき音でもよくきこえます。今遠の方で、微かに鈴がなつてゐるのがきこえるでせう(聲はなつてゐない)と暗示した時、きこえると返事をしたり、頭でさきこゑることを合図したならば中間状態であるから幻覚錯覚の實驗はできる、而し始めはなるべく易いことから實驗してゆくことが必要である。即ち始めから、コソコソを興へてこれは百円札だ君にやると云つても、喜んで受とると、いや異ふぞと思ふ人があるから、その時は、八かきか紙片でも興へて、これは百円札だと云ふは形が似てゐるから何人も百円紙幣だと思ひよるこんで度取るものである。又紙片を興へてこれ

第二節 暗示感應術

一 棒術。暗示感應術とは、普通状態のまゝで巧みに暗示をもつて他人の精神内体を探する方法であつて、やはり催眠術の一種であります。さて棒術とは、被術者に二本の長さ三四尺の棒の一端を持たせ、閉目を命じ、曰、杖は今君に不思議の術をかける。そゝするとその棒の先が内側によつてくる、エイツ、エイツ、そらよつてきた、もつとよるなど暗示する時は不思議によるものである。

忍術。催眠状態中の者ならワケなくできるが、普通状態のまゝで実験するには確固たる暗示力と、被術者に強い信仰心を必要とする、余は強感性の少年に對し屢々実験したことがあるが、實際は極めて無造作に行はれるものである。その方法を記せんに、曰、今僕が忍術をもつて姿をけす、僕がエイツと大鳴一聲すると姿が消ゆる。とさも自信ある態度で暗示し、エイツと大鳴すればよろしく、又印を結ぶ九字をさるなどの態度暗示を用ひるもよい。

重量変化術。前述の要領で物の重さを変へることもできる、無論實際変化するのでなく精神的に軽く重く感ずるのである。恰も、平素は一物をも持ち得ない病人や、かよわい婦人が、スワ火薬だと云へば、驚くべき力を出して二三十貫もあるやうな荷物を持ち出すのと同じく、曰、是は軽いと暗示すれば、それにてその暗示法が巧みであるときは五貫も十貫も軽く感じ、又、マツ竹箱や鉛菓のやうなものでも、重いと暗示すれば中があらぬものである、暗示法は少し熟練してくと隨時隨所に應用できるものである。

幽霊對話術。暗室に伴ひ行き向ひに幽霊が出て居ると云へばそのやうに感ずる。又ある地方には死人に面会させる術があり、一回の施術に五十円百円と出して渡術する人もある由だが、暗示法でこれもできる。

歩行停止法。曰、君、向ふより歩いてき給へ、僕が大鳴すれば、君の足に重力感應し、足はピツタリと釘づけになる。と云ふやうな暗示のもとに、エイツ止つた、足は動かぬ、にてできる。

受水法。まづ誰かに水を一ツパイ汲み来るやう命じ、その水をうけとり、さてこれより、此の水に諸君

のあのやみどほりの味をつけませ、と云ひ、註文をさぐるのである、今假に誰かが甘い水にして下さい、と云つたとすれば、曰、ハイ承知しました、今吾輩が思念をすれば此の水はキツト甘くなりませ、とて如何にか何か術でもかけて居るやうにコツポの周圍を掃でたり、水を蹴らむなど適宜態度暗示をとり、曰、サー、コレで甘くなつた。と云つて、指先きにチヨツとその水をつけ、それを自らなめ、曰、オ、甘い！、サー、吞み給へ術力が甘くなつておます。と云つて、その註文者に吞み給はせ、いと喜んで吞むのである、實際は甘くない普通の水だが暗示の作用で甘く思ふのである、その他辛い味でも、スツパイ味でも自由自在につくから便利。大衆の人の前でもやる時は始めよく感術しやうな被術者に対して行ふ、少々不慮の人でも現在感術した人を見ればすぐ感術するものである。催眠術大家は、かゝりにくい人に対しては、施術前によくかゝる人をかけて見せ、後術術すると云ふ巧妙な方法をとつておたのである。

人体吹飛術。君は僕がこゝから吹息すると後へ〜と寄つてゆく、プープー（吹息）ソーラもつと早く飛んでゆく、プープープープー

人体吸引術。今度は僕が息を吸ふと君は前へよつてくる、と暗示し、スー、スー、スーと吸息しなると、術者はやゝ身体を後ろへ反るやうにする、強感者は術者の体につきあたる位に寄つてくる。

脱倒術。僕がこゝから重力を送ると君の身体は後ろから何ものかに引かれるやうな気持ちをして倒れてゆく、と暗示して、直ちに重力を行ふ（ウーンと音を出すとか、印を結ぶとか、の類）

不動金縛術。形并に合掌するやう命じ、術者はその合掌せる手を固く押へ、曰、君の此手は術力により固く密着した、如何にしても決してとれぬ、取らんとすればする程固く密着する、エイツにて實現する、離れはしないだらうかとビク／＼し、取らんとすれば効が微弱である、先方をのみこんだやうな口調で気合的に暗示する、直接放散なら不動金縛り位はすぐできる。

一 人心操縦術。暗示の妙を得れば人事百敏に應用さるゝものであるが、これを詳論すれば後に一大冊となるから、こゝには著者の実験の一つを述べ以つて本筋は擧算する。或日、時計店へ行つたことが

ある、と云ふと色々の時計を出して来た、ズバリと沢山並べてある時計の中で、小生は右の端にある時計が気に入つた、が、思ふに故意に左の方の時計が気に入つたごとく見せがみ頻りに價をたづねたところ中尺高いことを云ふ、今度は、自己の欲しいと思ふ右の端の時計を、別に欲しくはないと云つた表情で、
「これは悪い品でせうね」と言ふたところ、
「いや、それは皆物です」と云ふ。かくして最後にその安物を巧く買取つたのである。

第三節 千里眼發現法

近來諸君に千里眼修行者が出現して来たから、會夏結成の中には既にこれが実験をざらんになつた人も沢山あること、思ふ。千里眼とはご承知の如く、遠い土地のことを遠視したり、或は又密封せる器物中の物を遠視したり、更に未來の事や過去を豫言したり、少く云へば病気の遠視や創傷の遠視、天気の豫報、物價の高低、勝敗の豫言、其他人事方面に應用されるのであり、近來は実験者が数多出現したから此術の存在を疑ふ人はないと思ふが、この能力は誰でも必ず發揮できるとは行きかねるのである。大体この千里眼は先天的のもの、人為的のもの、聖法の実修中へ聖法とは吸吸法や自己催眠や觀念法等の總稱、偶然に起るものとあり、人為的のものは、聖法の実修中へ聖法とは吸吸法や自己催眠や觀念法等の總稱、偶然に起るものと、努力して故意的に出るものとある。先天的のものが第一で人為的のものは第二である、人為的のものは何人も必ず百發百中の妙に至るものでない。各人の性質體質によつて能力の深淺がある。先天的のものは、先天的に此の能力を發揮するに便利なき素質をもつてゐるのであつて、人為的のものは修養によつてこの素質を形成してゆかうと云ふのである。

千里眼は近年に於て急にできたものでなく、随分古くから東洋にも西洋にも存在してゐたのである。偶然に自覺する者は別として、此の能力の出現する修養法は種々あるが、大抵此の能力の所有者は婦人が子供に多いやうである、婦人や子供に多いと云ふのは、比較的頭腦が小さいのと、感情強く理性弱いといふことや、骨格が強大でないことや、皮膚がなめらかならうかと云ふことと原因となるので

あらうと存じます。さて而からは如何にして此能力を發揮するかと云ふに、まづ

「自發法」から述べますと、後述の自己催眠を行ふ前に「自分はこの自己催眠中に明日の天氣がわかる」と何回も思念して後自己催眠に入るのである。そうすると良い能力の所有者は自己催眠中に、豁然として晴やかな野原をさまようやうと云ふやうな幻覺を起したり、或は誰かが「耳もとで『晴であるぞ』と云つたやうな氣がするるのである。その他晴と云ふ字が見えたり、雨天であるならば、雨の景色が見えたり全身雨にぬれたやうな氣持ちがしたり、此の靈應の狀は人によつて異なるもので中々文筆のつくす所でない。右天氣豫報の例をおぼたにすぎないが、其他何某の腹の中の兒は男であるか、又は女であるか、何某の家族は何人であるか、明日の相場はどうか、など色々の方面に應用されるのであるが、金錢の數字であるとか、密封せる器物中の給書や字などはむづがしく、何某は今手にどんな品物を持つてゐるかなどは易い、最初は易いことから始めて頂きたい、勿論一回や二回失敗したとして、ひるむやうでは駄目、一ヶ月位毎日行つてみて高できなければ、寸時休んで、時々行ひ、三四ヶ月も経つてから再び一ヶ月位づけて行つてみる、百發百中とは行かぬ迄も必ず幾分の能力は得るものである。又自己催眠は心身上有効であるから、千里眼能力は百發百中とは行かぬ迄もその中途に於て福産物は甚大である、世上に流行する某法の如く精神に異常を來したり、無効の努力に了つたりするやうなことはないが、安心の上練習していただきたい。次は

「他發法」を述べますと、まづ中間状態にすぐになる感應性の強い被術者に、催眠を施し、少しく実験の後次のやうに暗示を火へる。

イ) 熱擦法

「君は今そのとほりよく術にかゝつてゐる。僕の云ふことは何でも實現する、今こゝして蒸んでゐると君は蒸き深く眠つてゆく、(この時靜かに被術者の横に廻り兩手をもつて被術者の身体より一二寸はなれた所を前後とも上より下へなでる、これを何回もくりかへす。)ソラ君はいよいよ深くかゝつた、君の精神はよく統一した、隨つて君は守實精神に同化したから何でもよくわかる、全く君は神となつたのだ、今僕は手に

一 何を待つてゐるか、何となくわかってくる」と云ふやうな暗示を失へる。そして手に持つてゐる品（貨幣だとか紙だとか本だとかマツチと云つたやうなもの）が五六回の中したならば、目的のことをきく答を求めないのである、さう考へてゐるやうであらう（金貨やペンも不可なり）

（ロ） 気合 法

暗示法はイ法と同様であるがイ法は標準を行つたが口法は標準の下のかわりに気合法を用ゐるのである、即ち「今君はそのとほりよく眠つてゐる今こゝから君に気合をかける」と君は一層深くかゝつてゆく……」
気合は、エイツエイツと感力ある大声をもつて二十數回位失へる。
他覚法も七八回右の方法をやつてみて能力の足りない者は、一時中止し被術者をとりかへて行ふこと。
千里眼のできるやうになつたときは、その詳細をせむ、本会へ報告して頂きたい。

第四節 痲痺療燭法

私共が催眠術によつて薬の利益のうちの二つとして、先づ第一に痲痺の治療と云ふことを上げたいと思ひます。これは長文にわたること別に篇を改めて述べることにする。

第七節 自己催眠法

或る暗者が病氣にかゝつて寝てゐる所へ一人の友人がやつてきて、君は医を索とするものなのに病氣にかゝるとは、おかしいではないか、自分で自分を治したらどうだ、と云つた所が、その医師の答へに曰く、医者がかゝつたかゝつたと何とも思はずはない、散敷屋でも自分の頭のは伸びてくるぞ、と云つたやうですが、中々面白い話だと思ひます。平素病人にこの薬をのめとが、あの薬が効くと云つてゐる医者自身が一朝病にかゝつた時、平素患者にせしめてゐる薬をのむかと思ふと、あんな薬は自信がないと思ひながら飲まふいで自己の信頼する自己以上の医師にかゝつて居らざるやうである（薬でも効かないと思へば効がないし、医師でも自己の信頼する人につく、これ等は何を語るか）、話が餘談にわたつてきたが、自己催眠

は自分で自分が催眠術にかゝることであるが、痲痺治療でも悪癖矯正でも皆他人催眠と同じく偉大なる効を奏する。自己催眠に於ても熱してくれば他人催眠同様幻覚でも錯覚でも起るから面白い。如何程文章や演説の巧みな人でも、まだ見ぬ名所の美景そのまゝを語ることは不可能である。これと同様大いに催眠術をもつて他人を感化教道しつゝある人も自己催眠ができれば眞の術者としての資格がない。さてこの自己催眠法は一見他人に施術するより易い感があるが実は他人法よりは比較的むづかしいのである。而し熱心に修めすれば必ず何人も入術し得るから、左記方法のもとにせひやりとけて頂きたい。

準備。本会の自己催眠法は甲乙二法あるが、何れの場合でも、なまへく静か本室を換ぐ、且つ室内へ裸りに何人も入り来らないやうよく云つて置くことが必要である。光線はなるべく後ろからとるやうにし少しうす位方がよろしい。尚入術前に湯茶をのまふいと、其他の注意は他人に施術するのと同じ。他人法では係並に術者を信する人かかゝり易いが自己催眠法では自己はキツトかゝるとの確信が必要である。

第一型 式

右にかいたやうな準備を整へ長時間の座に堪得るやう、さぶとんを二三枚しいくい窓に座る。さて右手の持指をもつて左手の腕を念想する、此の時目を閉じてゐること、さて脈膊を導へるの外雑念がなくなつた時、しづかに頭上に両手を合掌する、これは他人に施術する第二法の時と同じ。そして、自分の手は離れくくる、キツト左右に開いてくる、開いたならば手は前にさがつてくる、手が下がると同時に頭も下がつてくる、そして自己催眠に入るのだ。と云ふ意味のことを強く自己暗示する（自己暗示とは心に強く思ふことだ、慢然と思ふのでなく心に刻みつけるやうに思ふこと）。すると手は徐々に頭の前にかがつかう、そして頭も下つてくるから、そのまゝ、放心の状態であること。注意すべきは自己暗示は強に強く思ふし、思念を二三回したならば、その後は何も思はないで、かゝらうがかゝらうが、どうともなれと云つたやうに、心を自然に放つて置くのである。

33 一 一定の時間がくればハツと気がついてさめるが、自己催眠に入る前に自己は十分間かゝるとか二十分間入術

—34—
するとか思念してをけば大体その時國にさめる、いくら永くても三十分位で、十五分、廿分ぐらいがよい。
又あまり眠い時に行くと睡眠に陥つて失ふから、之注意を要する。自己催眠は精神の衰微なときに行ふとよ
ろしい。

第二型 式

まず香燭とか火鉢の中に一本本の線香を立てる。線香もなるべくよい香のするものがよい(古来より
薫香と云ふものをくすべて精神統一を圖つておたふがある。我々はよい香を嗅ぐは精神の沈静をおぼへるこ
のである)さてその線香をや、高い所にまき(視神経を疲勞させるには高い所にまき方が早く目的が達せらる
のである)その線香に火を点し、三四尺はなれた所に座る。そしてその線香の火を凝視する、寸時すると
線香の火以外に何も見ゆなくなる、そして次第に目は疲勞してくる。なるべく目はたたませまいやうにし
て凝視する。(凝視してくと線香の火がたつて灰が落ちる音がパサリと微かに聞ゆるさうである)
眼が疲勞してきた頃、自己の眼はもうすぐ閉じる、閉じたならば自己催眠に入つたのだ、催眠に入つた
ならば自己の身体は微かに動揺してくる、そして次第に精神恍惚とかる、と自己暗示をする。
別に反抗せず自然に任せてをけば眼が閉じる、閉じたならば自己暗示によつてユラ／＼と微かに身体が
ゆれくるから、そのまゝ放心の状態で居れば恍惚として入術する。

第八章 病癆療矯法

第一節 精神療法沿革

精神療法と云ふ言葉は近代になつてできた言葉であるが、人間の精神作用を利用して病氣を治癒すると云ふ
ことは太古から行はれておたのである。今日世人は病氣にかゝれば一にも薬、二にも酒、三にも、醫師にかゝらねば
病氣は治らぬやうに思つてゐるが、精神療法は此醫術の祖先とか元祖とか云つたやうなものである。それ
くその方法の如きも古く下あつては、新術とか禁厭とか模倣術による治癒法と云つたやうな簡單なもので

ひろく希臘、埃及、支那、印度等から我國にも行はれておたのである。それから中世紀時代に於ては藥物療
法は單に精神療法の一助法として用ひられておたのであつて殆ど今日とは反対の有様である。それから近
世に至つては物質療法が長足の進歩を遂げた爲、精神療法は一時影をひそめておたのであるが、世人も、
物質一途の療法では到底完全な成績はあがらぬと云ふことを痛感し、やがて世界各國期せずして精神療
法が旺んとなり、歐米諸國の中には物質療法に先んじて精神療法の方が旺んに行はれてゐる所もあるの
有様で、我國に於ても今後益々新法は發展せんとするの有り様である。

第二節 精神療法乃原理

第一項 精神と肉體生命の關係

精神肉體の密着不離にしてその關係の微妙なること云ふ迄もない。吾人が病かして思へば必ず赤面充血し、
恐怖の念を起せば顔色蒼白となり悲しめば食慾減るは何等精神作用の立ちに肉體に影響を及ぼすとは世人
衆知の事である。又反対に入浴後は精神爽快を感じ、身體柔滑さるる時も心も柔暢されたる如く癆瘵で
ある、病は氣からと云ふ即ち悲哀、憤怒、嫉妬、恐怖等の劣情心は病癆を成る上に最も力ありと云ふが、又
大食暴飲其他肉體上の不養生も又病の原因たることは云ふ迄もない、かくの如く心身は密着不離、身を外に
して心なく、心を他にして身は成立たない。健康なる精神は健康なる肉體に宿るとは英國の理説であ
るが又健康なる精神は健康なる肉體を成る由とも云へるわけである。此のやうに我々は心身が一体である
から、今物質療法によつて肉體に變化を成へても病氣は治るが、又精神を治療しても直ちに肉體に影響して
病はなほるのである、共に有効なるは云ふ迄もない。而るに現今の狀態は物質療法は精神療法を排斥し、
精神療法は物質療法を重視する、之は甚だ誤りである、小さまも派流をもつて大眼目たる病士の撲滅を
忘れてはならない。即ち古語にある如く「わけ登る鹿の道は異へども同じ高嶺の月をみるかな」とある。
物質療法家は精神療法を排斥する必要はない、たゞ自己の目的とする方面に猛進すればよい、物質的に病
原を啗めてその治療法を究むればよい又精神療法と併用すれば一層完全である。本會は決して物質療法

36- の偉大なる功蹟を否認したり精神療法の方を暴言したりはせぬ。夫が本会の稱譽する精神療法について熱心に歩をすゝめるのみである。物質的療法のこととはその道の人々に一任するとして、いよいよ精神心靈の治癒的作用について尤記數十行に渉つて研究してゆくこととする。

第二項 精神の治癒的作用

病根は見方によれば血液の循環に歸するものである。かの洋々たる清流の如く人体を血液が平調に循環して居れば無病であるが、一個所に充血したり余血したりすると、恰も河水の止まりたる所に虫が湧くやうに、そこに病気が発生するのである。この血液循環は何によつて支配されるかと云ふと、それは神経が司るのである。而して又此の神経は精神作用が支配するのである。平調を欲した精神作用こそ實に病の因となるのである。病は自然に発生したものでない。凡そ如何なることでも必ず原因あつての結果であつて、病を始め一切の不幸は偶然発生したものでない。病は一種の天罰である、自分が求めたものである。蘇いた種が生じたのにすぎない。病のものは大抵精神である、さてこそ病氣とは氣を病むと言ふのであつて外國語を見ても此とほりである。されば、この病の因たる精神を治癒する精神療法の本なるは云ふ迄もないことである。さて而らば精神で病は作ると云ふが、その精神とはどんなものか、平調を失つた精神のことである。古語にも、心乱れて百病生じ心靜かにして万病癒ゆとあるがこれに間違ひない。少しくこのことについて諸名士の説を採集すれば、

カール・クイン氏曰く、凡人が甚しき悲哀の感にうたる時は血液の循環はにぶり、顔色は蒼白となり、筋はゆるみ、眼を垂れ、頭は俯し、胸膈は狭くなり、唇やほはその重さの爲に自然に下向し、その全体の停止動作に至る迄、快活雄健の心を有する者に比す時は、全くその状態を異にし、その胸中の悲哀煩悶は到底かくす由もない。オロストン氏曰く、可人生は元來、快活、希望、喜悦、相愛、幸福をもちつて送るべきものである。人の精神状態がかくある時は身体は極めて健全にして、諸種の機關も順調に活動するので

あるが之に反し心中に恐怖、憂鬱、憎悪、陰謀、愚計、失望等の情ある時は身体各部の機關はその活動を鈍らし、血液の循環は妨害され、遂に甚しく身体の健康を害するに至るものである。サイバー・ダブリュー・リチャードソン氏曰く、精神上に於ける勇氣の打撃から精液をひきこすことは決して珍しくない。是精神上から肉體の疾病をひきこす最も顯著なる実例である。サイジョー・ジバエツト氏曰く、自分は久しきに亙る悲哀或は煩悶の結果として癩腫が発生すると云ふことを信ずべき多くの実例を有す。マアー・ジソン氏曰く、自分は肝臓病が甚き悲哀、煩悶の結果として出たと思はる。実例の多きに驚くのである。偶然の暗合としては餘りにその例が多きにすぎるのである。又ツーク教授はその著心身相関論に於て、憂うつ、煩悶等の精神作用により発生する疾病を挙げて次の諸種であると云ふてゐる。痲瘋、白痴、諸種の麻痺症、コレラ、黄胆、白癆、在頭、神経に關する諸病、貧血、子宮、皮膚病、丹毒、等々、又傳染病はこれに対する恐怖心のため一層其發症の相繼を致すものであると。

以上學者の實驗になる數項の說に徴するも心の平和を害する精神作用が如何に疾病の原因を成すか、之を解することと思ふ。更に、精神作用が直ちに吾人の身体生命に影響するかと云ふ實例の二三を掲げせん。是は著者の友人の實驗談であるが、或る時食事中、飯の中から黒いものが出るので、検べてみると一匹の鼠が飯の中に死んでおたので一同は忽ち嘔吐を催したさうである、その内、主人のみは早く座を立つてそれを知りなかつたため何ともなかつた。今一つ是も本會々員某が直接教授を了つて歸つた際、弟さんが、シヤ、カ、で困つておたから、自分の鼻もくそを丸めてそれを三つ紙に包み、是はシヤクリ止めの妙薬だ、とさも大切さうに水と共に吞ませた所、ピツタリ止つた。今一つ中学校入學試験に落第した某は父兄や師に申わけなしと死を決し、夜の間に忙れて、鐵道柱生と云

一 38 人と、進行中の列車目がけて飛び込んだ所、勢餘つて向ふへ飛越して失つた、そこは草原であつた為微傷つしなかつたが、死ぬと決した為か、そのまゝ死んでゐるのを翌朝通行人が発見、死因を調べた所、食血であつた。

今度外國の例の一ニを挙ると、イタリーのセントフランシスと云ふ人は大のキリスト信者で、心中キリストが十字架に於て刑せられたることを思つてゐると、何等物質的刺戟を興へないのに手足から出血したと云ふ。

ドイツの某心理学者が、既決死刑囚人の目を白布でおほひ仰臥させ身体を動かさず、やうかた縛り、是から死刑を行なす。貴下の手首より血をしぼつて死刑を行なす。とて、手首を及物で切つたやうに思はせ、実は少しも傷をつかず、その手首から微温湯を滴下させ、囚人にさこゆるやう、囚人は手首から血が出るに随つて死んでくる。おもう大分出た、すぐに死ぬなど云つてゐた所、果して死亡してしまつたと、死囚をさらべると全身食血の痕跡を呈してゐたと。

今度有名なる心理学者、エルマーゲーツ氏の実験であるが、氏は、氷にて冷したる試験管の中に、平和なる氣息を吹きこむた所、氣息が露血して色透明の液体となつた、それから同じく怒りの氣息を實驗した所約五分間にして管中に有色の沈澱物が現はれた、即ち、怒りの時には紅色の沈澱物が生じ、悲しみの時には灰色、悔恨の時には石竹色の沈澱物が生ずると云ふのである。なほ研究をすゝめて、怒つた時の氣息から生じた物質を、人や動物に注射したところ、精神を刺戟して怒り易くなることを發見し、嫉妬の感情から得た物質を免や豚に注射するに寸時にして死んでしまつた。と。悪感情が素毒を生じて健康を害すること此如しである。

その他まだ実例はいくらでもあるが、一々云ふ迄もふく、諸氏も又斯る実験は沢山お持合せのこと、なるから此辺で擱筆し、次は精神療法に対する各学者の説の二三を抜記する。
醫學博士和田豊穂氏は、ヒステリーの患者に藥を興へても治らぬものゝ初はうすい、興へる人の

人心感化力と強い暗示誘導とが効を奏するのであつて精神療法を行ふが一番である云々と。
醫學博士原榮氏は、肺癆の如き病氣には悲觀煩悶、病氣に対する恐怖心を一掃し必かなほるとの確信を興へたならば一番よい云々と。

佛國、コピサート博士曰く、医師には大した上手下手はないものである。如何となれば、前の経験は後の志者に應用して必ず効があるものではない。醫術は不確定なる処方箋の集合である云ふことは平小べからざる事實である。藥物が人体に害を及ぼすことは公然の事實である。清潔なる水、新しき空氣、適度の運動は吾人藥局法の主眼である云々と。

米國、アロンズ、クラーク博士曰く、醫師は一つの科学なりと云ふは、實に無意味の妄言なり、醫師は推測の上に立ち病人によりて進歩す。醫師が人類に及ぶる害毒は決して利益をつぐなふものにあらず、自然に放任する時は確かに全快する病人も医療の結果生命を失ふものあつて數へきれずと。

ドクトルメグチーネ、木村國造氏曰く、人間の身体は實に不思議な程よくできてゐる、例へば異物が鼻やのどに入つた場合は自らクサメの出ることや、或は胃を害するが如き有害物を吞み下した場合に嘔吐をするが如き、若しくは一旦攝取したる食物が腸に於て腐敗醜穢した場合は直ちに下痢を起すが如きは皆是保護作用の結果である。而してこの自然の作用を防禦せず何処までもこれを助けてやるのが最も進歩した治療法の目的にかなつた蒸理のない自然療法である。

第三項 自然療能力について

今假りに、甲乙と云ふ二人の者が同じ病氣に同じ時になつたとして、同じ治療をしたとしても、同じ日に全快するとは限らぬ、療能のよく働いた人の方が早くなほるのである。療能(良能)とは自然療能作用のことである。即ち我々共が外傷をうけたり病氣になつた時、そのまゝ放つて置いても治るであらう、又牛や馬、犬猫なども病にかゝつたり傷をうけたりした時自然に治つて失ふであらう、是皆自然療能作用による所であらう。

若しこの力がないとすれば我々が切傷をうけ時にくらでも血が出て永久にその傷は治らないであらう。而るに直ちに凝血して細胞が固りに回復運動をおこすのは此の機能があらからである。今假りに吾人が傷をしたとして治療をうけるとする、するとまず消毒して他より細菌の侵入を防ぐのみで、傷が治る薬はつけないたが自然に治るのを待つのみである。疾病にした所で、現代医学では数種の薬物を除く外は、直接病に働く薬はない、たゞ一時苦痛をこまかす位のこと、其内に人間固有の機能を働いてなほるのであつて、このことは医聖ヒポクラテスが明言して以来現代の医家もみとめらるゝ所である、されば

日医は良能を助く也。病は天が癒しお禮は匠者が責か」と云ふのである。されば
 医業に数年かゝつて治らぬ病人が気合一音で治つたり、精神療法で治らぬ人が一回の灸で治つたり、灸で治らぬ人が鍼で治つたり、薬もせず又何の手当てもせずして病気が治つたとて別に不思議はないのである。畢竟物質療法も信仰療法も其他如何なる療法も直接間接の能力を表現する手段に他ならない。多くの人は知らずに病にかゝつて知らぬ間になほつてゐるのである。然るに少し智識のある人は自ら軽症を重症にしてゐる、病は牛馬や犬猫と異ひ万物の靈長たる高等動物であるから、それだけ優秀なる療能を持つてゐるはずである。而るに下等動物よりも罹病することが多いと云ふのは如何なるわけか、これは云ふ迄もなく高等動物ほど生理組織が複雑に複雑してゐるからで今一つは精神と云ふものが餘計に發達してゐるからである。かの掃除人夫の如く汚物を清潔にする仕事に従事してゐる尚且つ強壯なる人あるに、其身は清潔なる温度に居つて肺病にかゝる人もある、鬱菌に対して恐怖心さえいだけば抵抗力なくなり却つて鬱菌の浸入に好都合の場所を興へるのみである。又少しセキが出てゐる風邪やはあるまいか、肺ではあるまいかなどと氣を病んでそれが為病が進んでくる、医師の診断を乞ふ「肺炎が少し悪い」で済むから、……、……、など云はれると、もはや肺では仕方がない等と悲観する、落膽する而して我は不治の難病者なりと信ずるため、遂に自分で自分を美事な不治の病者とするのである。殊にその医師の診断が誤診であつたとすれば、暗示の力をもつて救入したことになる。其他腹が痛ければヤレヤレと言賜ではあるまいか、少し頭がホーツとすれば

はハハハは神無氣だなどと自分で病に決してしまふ、鬱病と一口に云つても色々種類があるが、病でもないのに自分で病だと決してゐる人程難病はないのである。こんな人とは此の病的精神さへ催眠術其他の方法(普通の説明ぐらゐでは却つて害になる位のもので初はうすい)で一掃して次へば必ず治るのである。ある人の話によれば我が國の新開地で一帯よく目につくのは營業の廣告、建物で目につくのは病院だといつてゐますが、あの大廣告によつて病を作る人は決して少なくない、又大学あたりで医学の講義をきき、それをおこなつてはめてみて立派に病氣を作る学生は欠山あるさうである。この要らぬ精神作用のため、おたら天授の自然療能もその作用を妨害されるからして中々病氣は回復しないのである。

講述の都合上本書では簡單なる説明に止めて置くが、大体今迄説き来た所により、凡ての原動力たる精神作用を完全に併せて物理上の注意を怠らぬならば、如何なる病氣も、悪癖も其他一切の不幸を退治することがキツトできるとの確信を得られたことと思ふ、よつていよいよ「施術法にうつることとする」。

第三節 催眠療法 施術法

氣の早い人はもはや治療の手袋をこ想像のことと思ふ。催眠療法は要するに、患者を催眠状態とし、病は心ほつた、と云ふ暗示を興へばよいのである。これを少しく詳説すれば次の如くである。

第一項 自療法

精神の作用を理解し必要の心労を止める時は罹病はせぬが、肉体的不養生をすればかゝらぬとも限らぬ。又既に病氣の人は精神を強固に持ち熱心に自療法を行ふと同時に生理上の養生にも注意することが必要である例へば大食のため胃を痛んだ場合、この方法を實行しても治るであらう、が而してその原因たる大食をやめることが最も全快のちかみちである。さて方法は

まづ既述せる自己催眠を行ふ前にあつて目的のことを思念し催眠中に思念の實現をはかるのである。(一) 心を示せば、愈々これから入術すると云ふ前に(自分はこれから自己催眠に入る、そしてこの自己催眠中に自分の心臓はなほ、キツト一回一回と良くなる、キツトよくなるぞ)以上のやうな具合に、強く自己の心に

一 42 一 刻みつけあゆむに十數回命ずるのである。悪癖ならば、假りに、どもり患者とすれば（自分はこの催眠中に吃音せしがキツトなる、今後何をやつてもスラ／＼云へる、決してあわてない）。其他能力の増進も記憶力の増進でも以上のやうな具合にやるのである。一回で目的を達することもあれば又十回二十回百回と回を重ねてなほることもある。

第二項 他 療法

まづ患者に催眠を施し、手があがる、身体がゆれるなどの暗示を二つ三つ決へてみて其暗示が實現した方からは用それでは、これからアタタの病氣をなほしてあげますと前暗示を興へ、次に病氣はなほつてゆくとか悪癖はなほつたと暗示すればよいのであるが、たゞ單に治つたと云ふばかりでなく、如何にも尤もらしく大へるのである。且つ何回もくりかへして興へた方が効が大である、尚此の場△術者△手△を患者にあて、撫でたり押へたりする動作を併用すれば患者が如何にも今自分は治りつゝあるのだとの所を起して一層有効である。輕症ならば一回で治つてしまつたと云つてもよいが少し重い病になると一回や二回では根治せぬが、この時は少しづつよいと云ふやうに暗示するのである。尚術前や術後といへども安心を興へるは云ふ近もない、尚他療法は別に一定の型——この病には斯う暗示すると云つたやうな——があるのではなからず、諸氏適宜にご研究下されたい。又他療法を大いに行ひたい今少し專断的に研究せんとする人は、本会の格意の巻をせむご一讀下されたい、極意の巻には治療法其他が詳述してあります。

第四節 療法 催眠術

以上に於て大體催眠術上の方法智識はつくしたのであります、詳論すれば限りがありませんから今回はこの位で擧算することとするが、ご不明の点は、質問規定にしたがつてドシ／＼ご質問下されたい。本会には催眠術及び催眠術の原理たる暗示は、演説の上に、談判の上に、商賣の上に、其他日常凡てに應用されるのであつて、切に諸君の意義あるご活用を祈つて止みませぬ。

當該諸君のやんで時々に一言するのは断じて新術を悪い方面に用ゐらぬことである。もとより會員諸君の中にはそんな悪意な方がないとは固く信するものであるが、催眠術のやゝ人々をある程度に遠ざけ、その術を悪用する時は恐るべき結果を招致するからである。されば法律にも、警察犯処罰令第二條の十九に、みだりに催眠術を行ひたる者はこれを罰するとあり、即ち正当なる方面——病氣の治療、悪癖の矯正、巫学術の練習研究等——に用ふるならは何等差支へない。世には催眠術類似の術をもつて催眠術と見るとか、催眠術以上のものがあるとか、甚しきに至つては催眠術の悪口を云つたりする人があるが、眞實研究者は何等の誇大廣告に迷さず邪教邪術を信じてはならない。而して世人が正しき精神科學の知識を得得ず、やゝ普及して頂きたいのである。では諸氏の、意義ある活用と、催眠術の大成功を祈つて、この欄を閉算する。以上。

中編 念力感應術講義

自四十五頁——至六十五頁

NIPPON,

HEIDŌKENKYŪKAI,

第一章 念力感應術原理

—41—

今回は念力感應術についてお話しすることに致します。
上編に於て説明しました催眠術では、大七才以下の小児や、重篤者、行儀不用の人、などには術を及ぼすことには不可能でありませし且つ暗示を以て後やるのすから先方の知らぬ間に術力を及ぼすといふやうなことを、
催眠術でなければできません。而るに此念力感應術では相手を知る知らぬの如何に係らず術力を及ぼすことができ、その奥堂に至れば凡ゆる動物は勿論、無生物に至る迄不可思議なる感應をみるに至るのであります。
故に催眠術と念力感應術の兩者を心得て居れば術上便利であります、即ち催眠術は有形的暗示で念力術は無形的暗示であるとも云へるのであります。そして此二つの術の原動力である、暗示と念力は、凡ての愛の根底となるのであります、現代要界に宣傳されつゝある術法は著名のもののみでも数々に上る有款であります、すなわち大部分は暗示か念力の何れか乃至は二つを用ひたのであります、尚独り重術のみでなく家敷上にも甚だ多く使用されてゐるのであります。

さて而ら念力とは何ぞやと申しますと、今假に私が腦藏患者を治療してゐるとしまして、此の病人はキツシ様の術力ではなほるぞ、君の腦藏は活るぞ、活れよ、活る、活る、などと思念しておきすと治るものとあります、此場合私の念力が感應して活つたと云へるのであります、我々の精神は、良いことでも悪いことでも、これは斯うだ、此種信じてしまへば、不治の病氣を作り出したり、又九死の病氣を治させたりします、故に今言及する方面、信念を誤らせずと其結果は善なるは明らかであります、例へば、自分の悪癖は治つた、もう人の前にでても赤面はしない、と常に確信し、一切の不潔悪處をすて、悪念を滅せば願望的迷妄心が排斥され潜在心に強く暗示されるから、やがて其悪癖は愈まされるに至るのであります、其他悪癖をつんでまますと、止れと思つたのみで疎慢がよつたり、固くなつたと思へば、血身や一部分が鉄の如くなる、即ち一息念一観で自身を自由自在にするに至るのであります(直接放散ならぬすくに此境に

達しきす)此と角、意識する思念が自己の心身上に力を及ぼすといふこと、此は患者に了解されるのであります(自覚)の實行可能なるは是で明かでありませし、而して此の念力が他人や動物に、更に進んでは無生物にまで感應すると云ふことは今日の狀態では尚議論の餘地が有りませし、學者の説も種々にわかれてゐるのであります、而して此の意識を認めらるゝのであります、即ち事實が證明する以上は疑ふ餘地が有りませし、本会役員諸氏を始め著者もこの事實を證明すべく貴重な実験を數々持合せて居りませし、何れも是等は他日実験要録の詳載することとし、世間一般に何人も見聞する事實の二三を考へてみても、我地に出で歿死した人の父母等子近親者友人等が歿死の日時と同時刻にその人を見たといふ事、其他旅行先で死んだ人が夢に現れて祝福を語つたといふ事、冥途に冥途の一息、呪釘が初を委したといふ、熱熱の精神遂に悪人も、取つたなど云ふ事例は世上數多あり、更に又廣く人の口の上のものでは、思ふ一念若をもとぼす(邪語)。情氣の発する金石石本とほる精神一到何事かなららむ(王陽明)などといふ事がありませし、是等は明かに念力の氣道を語つてゐるのであります。

而して前述の場合を考へてみまするに、精神統一になり念力が極度に濃集した時に感應が起るといふことが伺はれます。例へば前述の、人が其密然に不思議な現象が現はれるといふ事も、その時に至るといふことには此の世の慾望や雜念が悉く排除せられて清瑠瑠のやうな玲瓏の心に立ちかへり、ひたすら、自分の心を皆なたい、との観念のみが凝つて遂に幽霊となつたのであります。又呪及釘にせしめても、草不も踏ると云ふ至極時に異様の服を着た精神の靈を因り、オノレニツキ何某も呪及釘に殺シテヤル今打ッ釘ハ汝ノ心斷ニ打込ムノタト是又怨みの一念凝つて遂には死者を殺したり、病氣にしたりするのであります。是を以てみまするに、一切の雜念を止め精神統一に入り、恍惚状態となり、此の奥如の月の心から生じた思念の半信、たる靈能を起すのであります。そこで我々は平時に於ても散乱妄動の心を静止し明鏡止水の境に入り專注した念力は、實現するのであります。茲に修養の必要が生れてくるのであります。

—42—

第二章 念力養成法

念力養成法とは本会が特に名づけた名義でありまして、心力派及術、思念術、聖力派及術、観念法、念慮法、精神豊饒など云つてゐる人もあります。而して念力養成法の如きも色々の異名が三つありますが本会は堅固なる理論を押し何人にも実行容易にして効果の多大なる方法を選んだのであります。本法は、精神統一法であり、洗滌豊饒法であり、観念法なのであります。本書の示すとほり実行すれば忠実に應じるといふやうなことは断じてありません。

甲法

本書の三十三頁記載の自己催眠法(念慮式入術法)を行ふこと。本法を行へば驚くばかり念力豊田となり、その他之れに伴ふ効果は多大である。注意すべきは不自然な行動をとらぬこと、例へば手が寄ると思ふ所を決して故意に寄せず自感のまゝに任せること。

乙法

本法を呼吸法を行ふのであるが、呼吸法や正坐法が有効なるは諸氏の熟知のことと存じます。昔には効果は省察して進歩に実行法に移ります。何をなすにも姿勢を正しくするといふことは必要であります。呼吸法に於ては特に注意を要します。正座法とは普通正坐し、膝頭を少し開き入置き拳が二つ入るくらい足の指を重なり、両踵間に背筋を静かに置き、身体が前後左右に傾かずやう、頭首脊柱が曲らぬやう直直とし、両手は指を中にして軽く握り、膝の上を置き、目は自然に閉じるのであります。其他細かなことを定めてゐる人もあります。又坐禅では結跏趺坐、半跏趺坐といふのがあります。要するに正坐法は姿勢を正しくして気血の循環を順にし、心気的作用を平らかにするのであります。此正坐をするのみで大へん有効であります。此の正坐をしなれば気血の調整、即ち呼吸法を行ふると、肉体の強健上にも、聖徳の顯現上にも甚だ有効であります。

呼吸法にも色々種類があります。八掛外諸宗(本道)要するに理論的に呼吸すればよいのであります。その方法にも色々あります。吸うて口から呼く(腹吸)と云ふのと口から吸ひ鼻から呼く(仙家)鼻から吸ひ鼻から呼く(仏家)と云ふのがあります。何れからしても大差ありません。

胸式呼吸法。鼻から鼻から吸ひ鼻から呼び、吸ひに随つて胸をはつてゆくののであります。胸が一板になつて、胸口を開いて徐々に呼吸します。そして一回呼吸をした後は一と歇へます。此の呼吸法を二十回繰り返す行ないます。鼻から吸ひ、直ちに

腹式呼吸法に移ります。これは鼻から吸ひ鼻から胸に止めないで直ちに腹に送ります。なるべく下腹を緩ゆるゆるにします。胸や上腹を押さずてはぬけおせん。息を下に向つて押し下ゆるやうな具合にしますと下腹がやみ、但し下腹にウーンと力を入ることは禁物、自然に力が入るやうに任せておきます。息を吸つてしまつたならば呼吸を止めず鼻から徐々に息を鼻から吸ひます。呼吸するに随つて腹を膨らませ、息を吐くやうに居るのであります。腹式呼吸の歌をかねてはなりません。放心の状態が必要です。

注意

- (1) 一回の修養時間は大抵二十分以内です。始めに胸式呼吸を二十回行ひそれから時間のある迄腹式を行へます。十分以下では初めありません。食後直ちには行はぬ方がよろしい。
- (2) 毎日一定の時間に行つても又随時随所業務の餘暇に行つてもよろしい。
- (3) 如何なる姿勢でも行はなければ駄目です。多少を行へぬ、といふ人がありますが、如何なる多忙者でも、隙する時間を利用して行へばできます。十五分や十分を多く行つても構はぬはあります。ツマラぬ事を見れば呼吸法を行ふ方がよく休まります。
- (4) 呼吸法は行へば行つただけの効果は必ずありますから永久に何人も行ふやうにしたものです。現代の名士の著書、呼吸法などを行はれつゝある人は深山あります。又学校や青年團などの団体で実行しつゝあるのもみうけます。他の運動法に比して効果は甚大であります。

(ウ) 呼吸吸息とも者がしては駄目。スーと音がするやうでは空気の量が多いから出来るだけ静かに水く行ふこと。病人は極端進行は品ごと。又病氣によつては医師と相談の上行ふこと。

本法は念力感應術とは無関係のやうにみゆるけれど其本法を行つてゐると精神の凝集感場となり念を強大となりす。我々物質的頭腦を持つた者は物質的の一定の方法を行へば精神集中するのであります。聖能開法として心身強健法としてよく努力すべきであります。

右の自己催眠法、及び呼吸法により相当の練習をつまればなれば、次の實驗法の内、自感法を行つてみるのであります。自感法は入術式修養法となつてゐますから實驗を行ひながら念力を養成してゆくことになつてゐるのであります。思念が自己の心身上に実現するやうになつた後他感法や聖感法をやつて頂きたいので、最初からむづかしい實驗をた着手せぬやうして頂きたいのであります。初学の人は充分法を修めずして往々に術の實驗に走るからして失敗するのであります。

第三章 實 驗 法

自 感 法

聖棒術。長さ三四尺の棒を二本、各左右の手に一本づつ握つて、瞑目し、この棒は寄る寄る々々と思念を凝らす。他念なく寄ると云ふ一事が思念できれば棒はスーと寄つてきますが、次から次へと雑念の起る人は今少し修養する。如何なることでも數を重ねると云ふことが一大極意でありまして數を重ねることによつて一種の聖妙を發揮してきます。屢々練習することによつて次第と目的思念のみが明瞭に思念できるやうになり、更に念三昧に入ることができまます。斯なれば即ち精神統一であります。棒が寄つたならば、開くと思念します。思念するには身体に不自然の力を入らず下腹に軽く氣力を湛ゆるやうな態度で思念するので、呼吸は止める必要ありません念想を凝らせば思も自然に凝るやうになり念三昧に至れば息あるかないかわかりません。

開閉ができるやうに在れば上下もやりまます、此聖棒法は自己催眠によつて基本が養はれてゐますから直ぐに出来る筈であります。

身体屈倒術。前述の要領で身体が前に倒れる倒れると思念してゐると前に屈曲してきますし、其他後ろでも左右でも何者かに引かれる氣持がして倒れてゆきます。是もすぐに行ふことができます。皆くりかへして何回もやつてみ、完全に念力のみで倒れるやうに練習する、かくして次第と念力が強固となつてきたら、は今度は、

鐵棒硬直術。と云ふのを行ひまます。即ち身体が鐵棒の如く硬直となるのであります。これも、自己の身体は固くなつた鐵棒となつた、とくりかへし念ふのであります。熱練してくれば固くなつたと思へば腦にかたくなりまます。最初の内は固くなつた、とくり返し、思つてゐると少しづつひきまします。やうな氣持がして固くなつてきます。これができれば

人橋術。と云つて、二脚の椅子或は台を持ち出し、その上に頭と足をのせて、橋となりその腹上に大石をのせたり人をのせたりできます。せよによく行つてゐる人橋術は故意に生理上の力を入れたものが多く、生理的方法は手品や奇術と念やう聖術としての價値がありません。更に此の硬直の身体が後へ倒れると思念すればストーンと倒れますが少しも身体屈曲しません、こゝなれば

自己倒身術。ができたのであります。普通ではすぐに恐怖心がでて硬直倒身はできません。これはよく各地の劇場等で魔術師や奇術が行ひまますが自己の身体をストーンと倒すのも面白いものであります。行ふ時は少し頭を上げるやうにして行ふか又は頭の下へのみフロンを敷くとよろしい、廣い場所でないとい柱へ頭をうちつけた、すなから危険であります。

手掌固着術。手の平を頭や膝に置き、固く此手は密着したと念すれば自力ではとれなくなりまます。思念を止めればとれます。これができれば

腕力増大術。と云ふ面白い實驗ができます。胸さき一二寸の所に合掌して(神佛札料の邊)此の両手

一は固く密着した決してとれないと思念して居れば釘づけのやうにピッタリと持着して他人が離さうとしても中々はなれませぬ。是と同じで

握拳鐵化術と云つて右手を握り、自分の手は固くなつた石の塊となつたと思へば固くなり板を打つてもフン／＼と金槌のやうな音がします。若者の拳骨がふれると瓦でも板でも木割り／＼と割れる。

整重自在術。これは既に暗に、應術の術で述べた如く、重いと思へば何でも實際の目より重く感じ重いと思へば重く感ずる。若者が此人は軽いぞと思へば三四貫の力にしか感へない。

天狗飛切術。自己の身体は軽くなつたと確信してしまへば非常に身軽く感ずる、人が居るとか思ふといとか云ふ感の甚しい時など何処まで歩いてきたかわからない場合がある、又催突術で居れば思ふつた、鳥のやうに身軽くなつたと暗示すれば恰も飛鳥の如く走り、高崖を身がるく来たり四王殿もあつた、飛信をスラ／＼と登るなどおどろくやうなことをします。若天狗飛切術と云つたのは武術界他に無類の化

術身が固かつたのと今一つは此信念によつたものと思はれ、是が更に進めば

水上歩行法となるのでありまして、古来偉人が空中を飛行したとか或は水上を歩行したと云ふのは或は遊戯であらうと存じます。水上を歩行するぐらゐはできるとの確信を有する靈術家もぞ／＼ありま

す。實際やうて取ると一足か二足をア／＼と沈むのであります。所謂これは佛敎の神足通と云ふのでありま

す。然るに我々の内体は水上を歩行するとは不可能でありまして、後述する靈理遊法によるの外ありませぬ。又二三の書に六風車の權を翻かした物と共に飛雀の脚の香味やあり一日十度ずつ四ヶ月余り

此法を歩行すると書いてありませぬ。未だ修行したと云ふことを願ひたことがありませぬ。

遊歩行術。是に念力を集中すれば早く歩くことができませぬ。今方便として、五歩を歩む間は二三四五と念を唱へ、次のエツは念を唱へると云ふやうに簡式呼吸法に歩行しますと遊歩せぬのみならず、調子がついて非常に進む目的地につくことができませぬ。

遊歩遊法。神妙や秘術に奉じてみることを祈願してゐる人があつたが、中には可憐な

松は明日何の何某の所へ、借物の件につき談判に参ります。主水の喧嘩で自己の意志を主張することのできませぬ。よつて福日は加助をもちつて、スラ／＼と談判に勝利を得ますやう………と云ふ所を演説する人があつた。世間からや海外の神妙を得て美談に奇蹟を博したと云ふことがありませぬ。是等の輩なる前代が多量に遺棄するは多量なく、自己は神の守護があるのだ。今日は雄辯と云ふ。自己の暗示が働いたと云つたのであらうと存じます。故に此の遊法で、自己は雄辯となつた。何と云つてもスラ／＼と云ふやうに自己の意志を感ずるやうと強く自己暗示し、その暗示力を下腹丹田に運べば、常に感ずるやうに、談判に、演説に、討論に奇蹟を奏し得るのであります。



不動回轉術。是したるまゝ自己の身は動かさず、ついでと思念すれば立つことできませぬ。又立つたまゝ此天は動かないと思念すれば歩行することができませぬ。

念力運動法。正坐した右の手を軽く握り指先につけ腕を折り曲げ、此手は上下に震動してくる。と思念すること。時にして手は少し動いてくるから、益々激しく震動すると思念する時は手は強んに震動する、手が震動するから身体も共に震動してきて、中には全身がボーンと震動する人もありませぬ。一旦震動したならば思念を止めませぬ、それでも強んに動かせ

一 時雨の中法。本法は何人も無難のあることであります。即ち明朝の何時には旅行をするのだと云ふ。それならばと云つて、旅費不足と思念すれば不慮に目ざめませぬ。是は不知不覚の間に念が靈應術をやつてゐるの

一 千里身。が出現したのであります。

悪人悪呪術。悪人に悪念を通じて善心に立ちかへらせ或は排斥する方法であります。是も直接法と遠隔法とあります。悪念の一例を挙げてみます。何の何某の君は必ず今の計畫を中止せよ僕は必ず中止させるぞと云々、何の何某の君のやうな者は必ず我家を出て行け、君は深く自首して出よ必ず自首せよ、等の類であります。神は悪に根柢を突へておせせんから悪人は此靈障木によつて忽然と本心に立ちかへるのであります。

遠距離感應術。眞理は宇宙に遍在して居ますから距離の遠近は問題ではありません、且つ無線電信或は電話の如く受信人を問達したりするやうなことは代望と必要の交通に於てはありません、一寸も距離なら百里も千里も百万里も距離はあります、東京と悪人も遠隔を思ふも思ふ間に差はありません思つた時が達した時であります。少し古い問題でありますが、火薬との通信に用いた所で、燈火や起飛機又はガスタード式燈火等では出来さうもありませんが、先年英國の心理学者ヘレワードカーリントン博士によつて、此困難を目的を達する簡便な方法が主張されたのであります。其は傳心術によると云ふのであります。博士は空間的距離・地球と他の惑星との間の數百萬哩の距離は五哩の潜在意識の交通には何の支障もないといふのであります。さて本問題にかへりまして、其方法を述べますと、一つは冥目して北方の靄を思ひうかべるやうにして行ふ屢想式悪念法であります。今一つは先づ北方を思つてきた雙杯、寫眞、衣服、髪、爪、爪等を見つめ、行ふ。

- 一、如何にも念力が先きに直達するやうな態度信憑を行ひ少くとも十分以上は悪念を漸たおこすこと、
- 一、或可く人の變レブまりたる夜に九時——十二時位の方が効が最大であります、術者から発する悪念は四方へ散らすやうに思はれまゝが目印とした一物にしか行かれません。
- 一、方一被術者に關する物事もなく、又被術者の顔も知らない時は住所氏名を心中に觀ぶやうにして悪念するが或は被術者の名前を紙に記入して、それを被術者であること観定して行つてもよろしい。
- 一、身體に力を入れたり、あせつたりすることは禁物、最も沈着にして、強く悪念することが必要であります。

一、悪念は簡單にして繰返し突へること、又變換するのであつて口で云ふのもはよい。例、何某の君は活るキツト活るた々々、……、何某はもう塵草は吞まないらた々、……、何某は必ず歸りたくならた々、……、(行術不明者悪念法)

訓練してくると念力の遠達したことがハツとわかってくる、時に悪念中悪人の姿がボーツと現はれ、その部分のみが黒く見ゆるから貴下は肺に故障はないかと聞くと果して肺病だと云ひます。又悪人が幻覺となつて現はれ全快の礼を云つたりする、すると二三日して全快の礼状が来るなど色々の現象が起ります。以上が最も初悪念傳達法であります。

テレパシー。テレパシーのテレとは傳達でパシーは思想とか觀念を表すのであります。即ち傳心術のこととあります。前述の色々の方法も皆傳心術でありますが茲には讀心術の實際法をお話し致します。

讀心術。眞正の讀心術は千里眼の一種でありまして佛敎に云ふ所の大神通力の中の天眼通力に該當するものであります。是を解釋して千里眼のみに依つて行ふのと、念力感應術と千里眼の合併によつてできるものと云ふのと、念力感應術によつて行ふと云ふ三つになるであらうと本會は信じてゐるのであります。第一の場合——千里眼能力があれば精神統一すれば讀心のできるものであります。第二の場合の合併説——甲と云ふ人に千里眼能力があり乙と云ふ人が傳心(念力感應術)のできる場合、例へば一個の時計があるとして、甲の時計を、時計だ！時計だ！時計だ！と悪念しておますと甲の脳裡に時計と云ふことかパツと明瞭するものであります。又、甲乙二人でなければ出来ず他の人とやつてもできないと云ふのもあり、是等は種々の見解があります。餘り難雜に在るから茲には省思します。第三の場合一人の人に精神を沈靜させて置き傳心者が一心に、君は手を上げる、上げるやと思ひますとハツと上げます此の實際はすぐ何人

もできます。……、この方法は人間は心中に思つてゐることが筋肉に現はれて筋肉が活動すると云ふ理を應用

いたものであります。我々が力の入る眞鍮を懸置など見てみて知らぬ間に手を固く握つてゐるやうなものであります。実際はまづ一つの室に、マツチ箱、インギビン、筆の小さい一つの物を置くのどこかへ他人の隠して貰ふのであります。扱て自分(術者)は目隠しをして、その隠した人に手を繋いでもらつて、その道真まかくした室に入る。するとその隠した人は無論その道具のある所を知つてゐるから、どうしても其の物の才へ気が働いて、依つて甚だ微細ではあるが其の物の才へ手がチユツ／＼と動く、すると手を互に握りあつてゐるから、それを感する、斯くして一二歩づつ物の才へ近づいて行つて遂に的である。これは精神統一の出来る人ならば極めて微細なる腕の震動も甚だ顕著に感じて教分を出でずして分るのであります。直接教授生がよくやるが何れも二三分でおてるから不思議に見えます。ま、一つの遊戯として頭を時

には行つて頂きたいのであります。

催眠者感通法。催眠術にかゝつてゐる人は特に思念によく感するものであります。今から私が思念

を被術者の身体に接して思念するのであります。

消身術極意。若し悪友などでお合つた時具合が悪い場合などに本法は用ひるのであります。忍術とも

云ひべきものであります。路上、集會場等が相手にあつた場合は素早く頭を下に向け或可く相手の方を見

ないやうにし、突然の場合でありますから、思念の才としてウンと下腹に力を入れ手を固く握り、可自分

は依の目に入らない、目につかぬ、見つかからせよ」と思念せよ安全地帯へ逃れて行くのであります。

鳥島魚次心術。鳥島魚にも思念は通るのであります。その注意は

(1) 或べく一匹だけ居るものに試むること、最初は金魚のやうなものを一匹だけ器物の中に入れて思念

すること。

(2) 上へ上れと下れ、左へ行け、右へ行け、廻れ等の思念は容易であります。止まれの思念は困難

であります。

動物自在術。火や箱などから始め牛や馬などは感通がませい。歩行しつゝあるものより止まつてゐるもの

が容易であります。

物体念動術。物体に念力を及ぼすには時に強大なる念力を要するのであります。最初は軽い小さい物

から始めるのであります。真珠の法としては次のやうなものがあります。

念力水動法といふのは器物に水を一杯入れその上に軽い物体——木の葉、マツチの軸、木片、コト

等——を浮かべ、その物体を注視し乍ら、精神の統一を圖り、さて、右によれ、とか左によれなどと

するのであります。勿論初学者が一足飛びにこんな実験を行つても失敗に歸しますが相当修練してある人

ならば三四十分にして徐々に、極めて微かに動きたすのであります。

念力動搖法。天井より一本の糸を吊しその糸に小物体をくゞり、ゆれてくる、揺れる、と思念するので

あります。

無息消火術。ロソクに火を点し——或可く室内をうす暗くする——その火を凝視する、せし

て消火するに、思念が完全に火に集中すれば火はスッと長く伸びる、或はジリ／＼と火は

短くなつてくる、こゝ迄はくるが消して失ふのは中々困難である、著者も初行ひ遂に四十余日に消し

てしまつた。

念寫術。念寫とは念力を以つて(念力のみではない他に原理あり)寫眞乾板に文字や繪畫人物等を寫

寫することでありまして其原理は未だ確定してゐません、物理学者は主として光線の作用を以て研究し、心理

学者は精神非物質力を以て説明しやうとしてゐるのであります。さて其方法は念寫せんとする文字、繪畫

白紙に書いてとこ、してそれを四五分間凝視し、そのま目の位置を動かさないで乾板の上に視線を據つてゆ

き、必ず寫さんと確信を以つてそのまゝ十五分も凝視するのであります。何枚重ねてあつても思念

した板のみうつります。相当自信ができたならば行つて頂きたいのであります。

第四章 念力療法

自療法

なるべく禁煙薬をとり。そして呼吸法を行つて精神沈静ををはかるのであります。次に全心力を病患部に集中する、そして病氣、或は悪癖の治療(其他能力増大、記憶増進等何でも)を専ら思念するのであります。日常の定なる精神作用で、我々の心身上に悉く影響するのでありますから今精神統一して、念力療法が治療保健に効あるは云ふ迄もないこととあります。亦日二回(朝晩)位——一回十分以上は、はねはねか——行へば非常に有効であります。世上に種々さるる治療法は大抵この自己暗示をもつて、治療の果をあげるものでありまして、クレー氏の自己暗示や健全老學の默想等は有名であります。

本法を自己暗示法と併用すれば一層効が有ります。本法のみでもよく目的を達し得るは勿論であります。我々が念想を凝らして治療するといふのは、念想三昧に入つて自然と同一すればそこに人間本来の能力が、いて凡ての機能が旺盛に活動し、難症の迷妄心作風の精神が休止し潜在心に強い暗示を興へますから大いに療能が働きますから、病菌毒素は大小二便に排斥されるか、同化して失ふか、喰殺してしまふかするのであります。病弱者等が最初の練習困難の人は此治療法から入術するがよろしいのであります。又藥物併用法と申しまして、藥を用ふると共に此藥は一層よく効く、何處へ行つてどう効くと思念するのをも一法であります。

他療法

患者の病患部に手をあて、此の病は治る、治る日々……此悪癖は治る君はもう酒は呑まない、日々……とくり返し思念する時れはよいのであります。尚暗示も併用するのであります。又催眠療法と思念療法を併用すれば完全であります。催眠療法では精神教育や小見など術でできませんが本法は何病入にでも有効であります。又催眠術をかけられる面列が入りませんから甚だ便利であります。本合では術の時は催眠療法は希望者以外に用ひず大抵此の念力療法を用ひてみます。念力療法の場合でもよく説明(身證説得療法と云ふのも

靈道研究會教授録前傳
中篇 念力感應術講義了り。

あります)すると一層有効であります。

病患部に手をあてし思念しますと(人体放射線療法と云ふあり念想三昧に入れは靈的エネルギーが、如何にも治療して貰つて居るとの自己暗示を起し、今一つは靈的放射線の關係もあつて有効であります。が病患部不明の者は頭に接して思念すればよろしく場合によつては手を接せず被術者の身体の一部を(頭や病患部がよろし)兼視しやら思念するもよろしい。又遠隔療法も有効であります。此の場合には患者の寫真や衣服、筆跡などを患者と擬定して思念するのであります。袖佛の代筆が効を奏するやうなものであります。

其他治療法に關する詳細の秘訣は本合の教授録後傳に記載してありますからせむ御一讀下されたいのであります。



中^ナ

編^{ヘン}

科

外

講

話

六十五ページより

靈道研究会



以上述べ来た上編、中編の二編に於て、本会所定の性霊研究を念カ術の二課は了つたのであるが、近時旺んに靈能問題を云々するに至り、中には誇大虚語の廣告を以つて世人を瞞着せんとする者あり、又研究者の中にも、妄想迷信に因はれて心身の健康を損じ、且つ塵世の道を誤るものありよつて、本書に於ては科外として、(一)偽心霊現象の研究、(二)心霊問題の研究、(三)各派靈術の研究、の三科について其大要を研究することとした次第である。

第一章 偽心霊現象研究

俗に氣心術とか神術と稱して神教視してある半物理的方法である、本法は秘傳(種あかし)さへ知れば、何人も直ちに実行できるものであるが、一部の靈術者は秘法として殊更勿体ぶつて高額の料金を徴収し或は長日敷を不要にするのであるが、本会はこれを現代の科学生理学に照して最も安全なる実験法を記述せり、もし直接教授なら一言の説明のもとに実行可能であるが、秘習では本書の示す所を厳守して漸行して頂きたい。

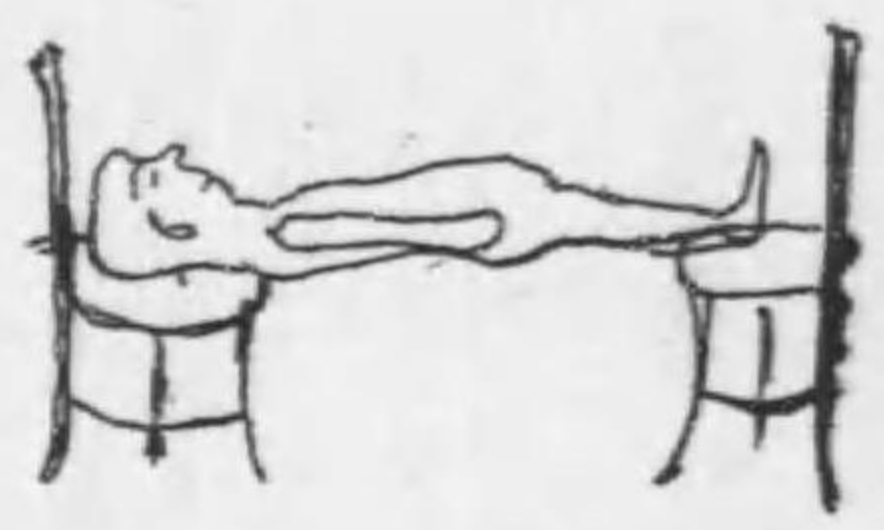
金剛力法

イ) 人体を指二本で上かゝる方法



この要領は三人で行ふのである。甲乙二人は互に向ひ合つて両手を合せ、丙は甲の後へ廻り甲の足の下へ指を二本づつ入れて、エイツの氣合と共に腕に力を入れて甲の身体を持上げるのである。一見、若の二本位で上がるだらうか、との疑ひがあるが、實地に行つてみると、少しも重くない、實は重量は前の乙にかゝることとなるのである、十二三の小供が三十貫の相撲取を上かたと云ふ話もある。

ロ) 腹上の大石を割る法 人身を橋架けとして人を載せる方法



ニ) 指先二本で相手の力を抜く方法



ホ) 小指でヒバシを曲げる法

一七九号で火箸の一端を握り、火箸の上端に小指を引っかけ、グイツと引くと同時に左手を前に突き出す、すると両手の力が合せて曲がる、是も要領は直接でないとお傳へするの

二台の椅子に圓の如く橋架けとなり、自己の身体は曲らないやと思念し、尻ら全身に力を充満し、特に下腹に力を入れる、そして呼吸は細長くする、さて、ヨシの合図のもとに靜かに人をのせる、その時は極度に身体に力を入れる、最初の内は頭と足を深く椅子にかけると速へ易い。
石を打たすには、なるべく平たい五貫以上十二三貫迄のものを用意し、それを腹上にて棒で打たすのである。此場合甚だ痛さうに思はれ、何ともない否打つてくれる方が却つて樂である。大なる物を小なる物で打てば、其力は小なるものより方へ反働する、隨つて面積の廣い石を棒で打つても、答へないのである、實際の際注意すべきは、顔面に石の破片が飛んで来ないやう注意する必要がある。ま、ビク／＼せず實際にやつてみると、この方法でも意外にややくでさるのに驚かれるであらう。

まづ三四尺の棒を一本用意し、相手に棒の上を両手で、全力を以つて押へさせる、我は其の棒を人差指と中指の二本でツマミ上げるのである。さてその方法は圓の如く棒を棒に近くかきへ、右手は小指の方を上にして、中指人差指を下から持つて行き、棒の下端より一尺位の所をグイツとつかんで、ニゲルが如くして上げるのである、直接実験を見れば、餘りに簡単にできるのに驚くのである。

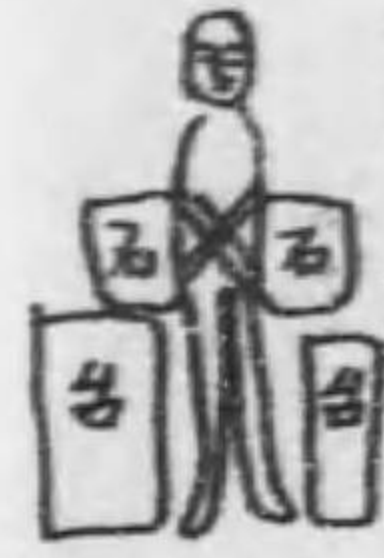
困難である、若者が行ふと直徑三寸位のヒバシも鉈の様にやうに曲がるから面白い。
 (2) 素手で麻繩を巻く法
 二三十貫もある物体を吊してもきれない麻の結を、両手に巻きつけエイツの気合請夫あさぢきるのであるが、是は手に巻く時尤團のやうに巻くのである。



右の(ハ)團の如く手の平の中央でくみちがふやうに巻いて右手で一端を持ちクイツ！と急に引くと巻れる。
 (1) 片腕に怪力を現はす法

三四尺位の棒を横たへればその中央を右手でシツカと握り、相手にその左右を両手に持たせて、相合ひをしても頂けないと云ふ方法である。懸練してくれば相手は二人でも勝つことが出来る。
 本法は團の如く右足を前に出し体を低く前屈みにかまへ相手の目をくらみつけ尻ら、少し上の方向に向つて押してゆくのである、さすれば先方の力を上方に放つるか故に必勝す。

(4) 七八十貫の物を持つ法
 この水は人の腰骨はさつぐに下に押す力に耐しては強くては弱くたは弱くと云ふ実験にはかならぬ。
 オブ二つの箱又は椅子のやうなものを一尺の繩を置いて置き、その上に三四尺貫位の石を一個ずつをく、更にその間へ成敷者が入り、その石を腰へしかと吊りつける、左右の石の重さは平均を導す。そして術者は直立してエイツと気合と共に、助手に石の下の台を左右同時クストツととらす。するとへたくすと倒れると思ひのほか術者は平然。石を下



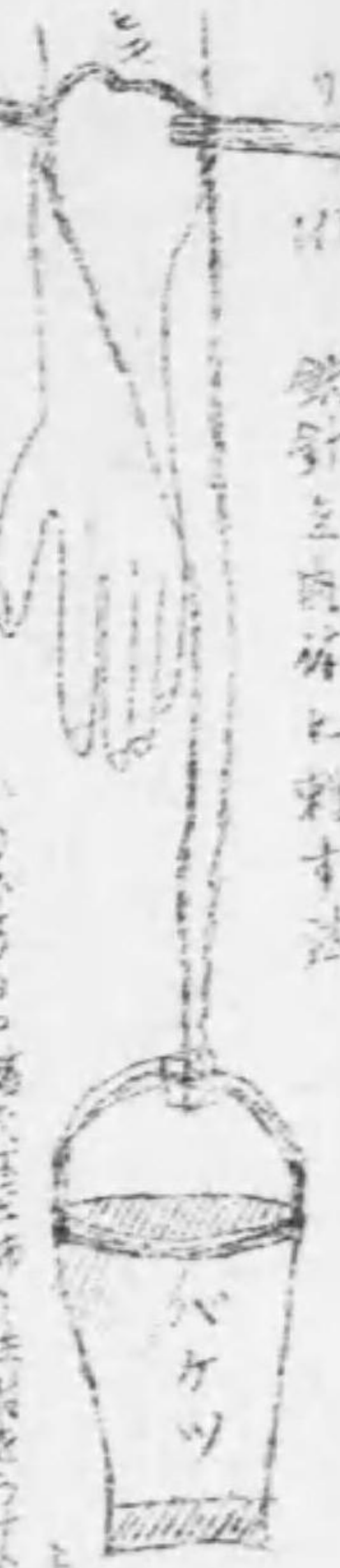
ろす時は又台をに入れて後下ろすのである。

(1) 武 道 術 折 術



團の如く四尺位の棒を、三尺位を置いて二本立て、その棒より短くよりを吊し、その中へ一本の青竹(最初の中は細いものを用ひ且懸練するに慣つて太いものを用ひる)を入れ、その棒の中央を、木刀を以つてエイツとばかりに打つ折るのであるが、その時紙をさらした棒の両端を握るものである。これは別に鉄線といつてない懸練次第である。打つ時の心得を三つ、押へつるやうにガンと打つては駄目、やうかと云つて弱く打つても棒は折れぬ、オブ大上段に木刀を振かぶり棒の中央目かけて全力をもちつて打つ、打つる時

(2) 不 死 身 法



本法は腹内、顔面其他に針を刺す方法であるが、夏も別にもぶかしの、指の痛い、痛く危い、と必死念を成し、思ひに思ひきつて刺せばさうして、針は中々かけつけられない、横に刺すのみである。

(1) 舞敷とも(前記とは異なること)なるべく刺さぬこと、万一ぬがぬ場合は指で押入ると止血す。

(2) 蒸氣してくると針に血をかけ人をぶら下るたり、大なる水の入ったバケツを吊り下ることもでき、その時は逆の如くやること。

附記。我々は竹針は相当地のツアリツアリと紙にでも刺すやうな具合にはゆきかぬ、木製針位の細い針なら入るしと刺さるが大針になるとツルツルして刺すににくい。若し諸君にして実験の、大針の折違はら、本念に於て、概然きの大針を三本四十本で試す。

(3) 熱湯中に入る方法

直前にやうな熱湯(湯気がぬぐ火常をもつて試すべし)の一端をぬが手拭で巻いて先で持ち、サーツばかりに右手をもつてサーツを拭くのである、手は熱を焼けたがれてしまふかと思ふと、さうでないと思ふと右の針が手について、針を熱するやうな水で洗はせよ。この方法は不早く左の手を運ばせるとさうど針が折れるやうである。即ち、電光石火の勢をサーツとサーツと熱の手につける遊に運ばせしめるのである。又平に湯をつけてやる人があつたは是では手首に類して入るから、要するに暖湯の如き早業をまつて手をして湯はよるしやである。

(4) 熱湯中に手を入れる方法

これも前記と同様又早くやると云ふだけがあつて、蒸氣してくればコツツに湯を注いで出したたりするやうに、湯桶に湯を注いでおる時に手を入れる人はない大抵、一旦金の湯を桶にうつし少し冷めた頃行ふのである。又湯桶として、毎日湯の中に手を入れる練習を次第に熱度を増してゆく練習をするならば湯には平氣で湯の中へ手を入られるのであつて、かの日本源七女などが仙人が一時早業の奇法を行つてお江戸の人々を驚かしたのも実は彼人は元徳湯桶が湯桶で練習されておたのである。

(5) 手を火に接して熱くしない方法

ランプ又はローソク四五本に火を点し、其火中に手を入れると云ふ方法であるが、本記法の秘傳は手の平に力を入れ、ランプ又はローソクのシンを摩するやう、殆んどシンに手が接する程度に入れると少しもあつくない。

(6) 火を喰ふ術

この術はお話にならぬ程のもので、まづ藁本のお箸、或は直径五分以下の杉丸太に火を点しそれをムシヤクと喰するのであるが、是は唇に火が觸れぬやうに入早く口の中へ入れ、直ぐに口を閉じがリツとかめは良い杉の木は如何程燃ゆるても口中に入れてしまへは消える。必お杉の木、或はギビガラに限るのである。何の試験に際らず、易いからと云つて餘りに軽々に取扱つておると思はぬ失敗をかき公衆の面前で火能を演ぶ者から免くべし注意されたい。極めて卑劣なことも屢々練習することによつて一種の靈妙を發揮して行くものである。

(7) 白及自在術

真刀は直に磨し、引いておきおれぬ。本法はビク／＼と力を進めたやう細心の注意を拂ひながら行ふこと、必お一歩誤ると傷くからご注意が必要である。まづ及の上を煮足で洗う法は二本の五寸角位の木に切込みを依り、それに刃を及を上にしてしつかりと入れる、さて及物は上から押して、も切れるものではないから、足を及の上のせる時、下ろす時、ま直ぐに上下するやうに、それ等は切れるない、足の裏は屈めても伸ばしてはいけぬ、普通のまゝで行ふこと、上つてから足を少しでも動すと切れるから注意が必要である。此の及の上に立つた精神の如く平氣でも脚を動かして居れば何をしてても能率増進する。この及渡りができたならば是と同様に、刀で薪を作つて、それを昇ることもできるのである。其他真刀の火、引きや、洋の白及を、まづクのも真正に引けば切れるのである。

(8) 火滅りごまの法

火はよく行看山伏がやることであるが、まづ火力の弱き三尺位の燭を一箇位、長さ一尺を掛けそれを火にし、やう火力の弱つた時、右清めと稱して燭をバラ／＼と(燭は熱を吸収する)まき、火を平たくする

一ためにパン、パンと水で火を叩き、さていよ／＼行者は炭火の路の一端より奇妙な白い衣服に襟をかけ足か
らゆき膝丈しく、エイヤエイヤと九字を切り印を結んで火の上を渡つてゆく、又炭の代りに薪を用ふることも
ある。一見むづかしさうだが、是は神力や呪文などは必要としない。即ち舟や車でも色んな手段で火力を
鎮らせて後、身中で最も皮の厚い足の裏をズン／＼歩くのだから、火の上に足の裏がついて居るのは本
の隣間から左右の足を交互に歩んでゆくのだから恐怖心を除き活況にかけは誰でもできる。

(4) 口中突火術

ローソクの火を口中に四五秒間入れると云ふのであるが、是も口へ入れる時感に火が覆水盆やうに注意し、口
中に入れた方ならば、少しづつ息を呼いて火力を弱めるやうにして火の位置をかへる一知所のみに火をあてる
必から前後左右に火をやるのである、且つローソクに突火したならば直ちに口中に入れた火を、するとまだ火力
が弱いし又火が落ちぬから都合がよい。最初一本のローソクで行なふには七八本位で行ふ。

(5) 熱口一落手術

ローソクに突火し、ホタリ／＼と落下する口を手につける方法であるが、是は不思議でも奇蹟でもない
漢口 には皮膚を傷ける程の熱度はない、世人が勝手に熱いものであると決してゐるのである。

(6) 掌上の突火術

ローソクを短く切り、手の上に熱口を落して、その上に短いローソクを立て、突火し、熱いままそのま
しの本舞や居ると云ふのであるが、これも熱さうに見ゆるが行つてみれば方づかない。火の上はあつたが下
部にある手はあつくないのが当然である。すべて此様な術は一思ひで行ふ、何人にもできるやうであるが自
行へないものと決してゐるのである、行はなければ何年経つても註文とほりに出来ないのである。

(7) 頭でビンや瓦を割る方法

是も思ひきつて善よく行ればできるのであるが注意としては

(1) 確信がなまる迄は瓦一なるべくうすい／＼やどり、元割りがなまるから、ビンにうつること。ビン
も初めの中はカン徳りのうすいものから始める、熱度は一竹ビンでもビールビンでもわかる。



(2)



(3)



(2) Aの箇の如く瓦の両端を持ち高く上げ、首を少し締め、エイと一声一思ひに手を急激に下ろすと同時に
頭をウンと仰げすと太カリと瓦は二ツ三ツに割れる。此時歯は軽くかみ合せて置くこと。一枚が割れる
やうにすれば二枚三枚と重ねて行つても同じことである。

(4) ビンを割るには(1)の如く準備した手に持つたビンを通光る火の早業で頭に打つけると同時に頭も
の方に向つて進めるのである、そして打ちつけると同時に其手をゆるかに元にかへす、で旨いも頭を傷け
る弊害がある。ピンは大抵コナミ、ガンとなるから見物人に豫め注意して置く必要がある。

(5) 割れ物を割りたいと頭を突つたりゴブがもたたりするから、本法は善くやれば知る程に全である。

(6) 水月を拳でつかす法

水月とは、俗に云ふミヅナギと云ふ所で、是は重要なる所、活法も人工呼吸法も効を奏せぬと云ふ重要
なる所である。これをドンと喉かしても平気であるといふ方法である。さてその方



法はさづ充分に息を吸ひ込み少し呼吸を止むと喉に力を入れる、さて少し身体を前に
屈めるやうにし水月の部分を少し凹ませる、そして息を止める(柔道の崩身は息を
呼いた時に入れるのである)その時つかすのである。平生腹式呼吸によつて腹力を
養つてゐると易々とできるものである、一歩譲ると命をなくなるから充分注意して行つて頂きたい。又相

一 清水式は自己催眠によつて精神統一に入るのであるが其修法中儀容と認めるのは動座法である。正坐して両手を膝の上に置き、身体を前屈後反、前後に動揺させるのである。直接清水先生の指導をうける時は一人づつエイトエイトの割合をもつて指導せらる。回を重ぬるに随ひ次第と無念無想の境に入り、又実習中當然なる呼吸排痰作用、横隔膜の血圧作用、神経刺激作用等生理上の効果は莫大である。清水式他人催眠法は上編に於て既述したから省略する。

横井式精神統一法

身体に不自然な力の入りぬやう安座し、前方の高き一尺を凝視する、次に凝視しつつある目を少し上方に昇上させたやうに、そして、観念を以つて統一境に入る、この凝視をくりかへす。

土方式精神統一法

紙を直径五六寸の丸形に切りそれを簡單な文字を墨でかき、それを黒色の紙の上に置く。次に白圓紙の文字を凝視すること約一分にして視線を黒色の紙の上に止す。すると黒く書いた文字は白く白い部分は黒く輝りだすものである、これを一回の練習に三回行ふ、此法が出来れば次は発光体の物影を頼らうとする練習をする、その次は暗室に鏡を用意しこれに自分の姿をうつすのであるが、自分の姿を見る能はざるに至れば精神統一は完習である。以上は自己法であるが他人法は術者の手を被術者の胸腹部に押し要動を促すのである、其他被術者の耳許や首を触れ、或は聲を立て、護善し、其他時計の音を聞かせるなどして目的を達するのである、大抵一週間の外で統一に入る。

相馬式自己催眠法

呼吸法の実習には多く目を閉じて行ふのであるが、又目を少し開いて自己の鼻柱を見つめるやうにして行ふのも沈心に効がある、相馬透徹先生の方法は眼を半ば開いて鼻柱を凝視し乍ら呼吸法を行ふ。尚呼吸の数を一より十迄くりかへし算へるのである、これくりかへしてゐると遂に恍惚境に入る。

江間式心身鍛錬法

高崎道人江間俊一先生の方法である。江間氏の三六目的とす。一、判断力を正確ならしめること。二、断行力を剛強ならしめること。三、高気養神を得せしむること。であるが、此目的を達するためには静坐法を修して識的機能を発達せしめ、猛烈に腹式呼吸を修して働的機能を発達せしめるのである、而して先生の説によると呼吸法を先きに行ひて、静坐法は後に修した方がよいとしてある。さてその呼吸法は口より吸氣するに随ひ次第と足心腰脚に力を込めるのである又一層猛烈に行ふために身体への字やレの字として行ふ方法もある。江間式は口より吸氣し鼻から出すのである。次に静坐法は鎌倉本勢で坐り、或は椅子により、平座に呼吸し（力は入れない）精神を落ち着け、現在自身に關係ある問題で一寸判断のつきかぬことを持出し之に精神を集中し一し無慮考するのである。此の判断力を増進する静坐法と断行力を剛強にする腹式呼吸法とを併せ行する時は、其修業が其の無慮考法と異なるのである。

二 水 式 呼 吸 法

今迄述べた呼吸法について述べてきたが其効果については説明してないから茲に一ととほりお説することとする、それについて醫學界の大家であり二水式呼吸法の創始者である、醫學博士二水謙三先生の、腹式呼吸の説、の一節を拜借して呼吸法の効果も大なることを説くこととする。

人間の腹と胸の間に一枚の膜があり、それが横膈膜と稱する。天が横膈膜と稱する膜で余を、中に高くなつて居ります。此膜の上が即ち胸で肺が入つて居ります、此横膈膜の上で少し下方に心臓がついて居ります。横膈膜の下は腹であります。で此胸は骨でできて居る即ち肋骨で出来て居る、少し動くやうになつて居る、之が動く時は肺が広がる、然し完全には胸を働かすには胸と腹と同時に働かねばならぬ、呼吸は肺と腹ととが腹壁とか申しまして、柔かい横膈膜と腹壁とが動き居る、是は伸縮が隨意にできる膜である、それが心臓と腹との境をなしてゐる横膈膜とはどんなものかと云ふと、これはマン丸の治度、傘が骨盤、若くは車夫の被る腰筒笠のやうな形になつて居る、そして、腹式呼吸は今の骨方に張つてゐる、であるから此横膈膜が縮み

ますといふことか、肺の高さが低くなる、肺は横膈膜の下つてくるのであり、肺は縮むと横膈膜の下つてくる、肺は縮むと横膈膜の上つてゆく、横膈膜が下ると肺が廣くなる、胸が廣くなれば肺が廣がる。そのかわりに腹の方を狭くする。肺が狭くなれば胸がどうなるか、胸が狭くなれば三つを得ず腹は前へ出てくる、腹の中には胃や腸が一併入つて居るから上から壓されると肺は前へ出てくる、次に横膈膜が上がる、胸が狭くなつて肺が縮まり其代りに腹は廣くなるから内臓は上に上つて腹を凹む。これが横膈膜の働きであり、腹中は閉ざされた腔であつてどこからも空氣の入る所がないから横膈膜は上ると腹は凹むのです。だから腹が出るやうに云ふことは横膈膜を下中るといふことであります。それからもう一つは心臓が押し出す。心臓は横膈膜の上にあるから横膈膜が上がる、心臓は押しつけられて縮小になる、横膈膜が下ると心臓は楽になる。

人間の血液は體量の十三分の一であつて、これは大さき人でも二分五合より多いことはない、吾々のやうな少さな者は二分五合しかない。ところが其血液の分岐はどうかと云ふと二分五合の中半分以上は腹の中に入つてしまふ。即ち四分の二は腹に入り、他の四分の一は胸胃を養ひ、其他の四分の一は腸とか皮膚とか他の内臓を養ふので、すから腸とか皮膚とかいふものは實に溺れなものであります。かういふ風に血液の分配はちやんと定まつてゐる。然るに横膈膜がフワフワ弛緩してゐると、もとより粗筋や血管の努力で之を制御して居るけれども、まだまだ沢山血液は溜るものでも、茲に二分の一以上の血液が腹に入り、かういふやうになると今度は全身に環る血が少なくなつて食血になる。かう云ふのは實際の事であらう、血は溜めなければ、ために、一方によいに溜つて他の方面に於て食血を起す、こんな人は世の中に沢山あります、かういふ人は身體の經濟の持たざるや、よくやれは完全な健康の人に必ずなる。之を解せないでおゐるのは、一様なことであります。血は手や足や頭には皆一定の量があり、それ以上入ることはできませぬが、腹だけは血の運ぶる路の隘路で、何でも入る、恰度、飯を二膳や三膳食へてもそればかりに食へる前と、別に腹が大いに漲つてゐる、何で血が溜つて居る血さへ押し出してしまふ事があると、全身に

環ることになり、非常に身體の經濟なたる。先づ腹に溜つて居るといふと、他の部分の血の環りの悪いことはわかつてゐるが、それのみに、血自身も悪い。腹に悪い血、即ち循環しない血が沢山たまつて居るから、血は行けず、悪い血の中、腹にたまつてゐる、腹の動悸の強い人は其病を人である。腹を押へてみると腹皮は柔が、動悸が打つてドキドキしてゐる。それがあれば、何でも腹から血を押し出すことが必要になつてくる、それは即ち腹を前に張る、腹を張るといふのは横膈膜を下中力を入れるといふことが必要になつてくる、それは即ち腹を前に張る、腹を張るといふのは横膈膜を下中るので、さうすると今度は腹の壓力が強くなるから血が滞つて居らぬ、さうして上に上がつてゆく、このことについては十數年前に三浦野治博士も説かれてゐる。斯ういふ風に、腹と足との間には血管に靜脈瓣とある。その間に腹から押し出したならば血は足の方へ下りはしないかと云へば、腹と足との間には血管に靜脈瓣といふ瓣があり、血の下がることを許さぬから、皆心臓の方に居る。かういふ風に心臓に血が戻る、腹さといふことである。腹式呼吸法に依つて横膈膜を下中る、而して其の結果腹は前へ出て来ると、腹は固くなり、固くなる、血が心臓に歸るのであり、それでありますから腹式呼吸といふことは狭く、下から出る方法で、血の環りをよくするに長以上の善いことではないのです、心臓は胸の間に一つありますけれども、胸にある心臓は唯血を押し下げるだけで押し上げる方は心臓は腹全体が一の心臓である、私か腹は一の靜脈心臓である、静脈心臓のは此點であり、さうしてみると腹式呼吸、即ち横膈膜呼吸といふことは呼吸も腹は唯静脈心臓にも、それでありますから横膈膜がクマンと張つてゐるといふことにも恐れ、腹力の揺るといふのは其処にある。.....中略.....

一、自分をもとより一着にならうといふ考へはない。唯呼吸法の長めに此呼吸法にどんな價があるか研究してみる積りであつたが次第次第についでみると誰も采てゐない、漸く三十分たつて第三着がついたといふ聲で、
「蒸氣呼吸法」といふものゝ名前の聲が聞かれると云ふ信念を固めたのであります。

それから腹式呼吸が神経に向つてどういふ働きをするかと考へますれば、腹部に來てゐる神経は、迷走神経、内臓神経、交感神経等であり、これらも大抵は神経のみであり、其上に胃腸の壁の中には固有神経叢といふのがあつて、それぞ腹式呼吸が腹壁に腹壁によつて機械的刺戟をうけると、これ等の神経は、或は胃腸興奮性及び制止的に働き、即ち胃腸の運動が鈍過する時は之を強し、又あまり強過ぎて下痢などを起す時は之を止むるやうに働き、或は胃腸に於ける血管の收縮又は擴張機能を司り、或は胃腸液の分泌を促かし或は腎臓に向つては尿利を強むる。又は是等の神経が適當の刺戟をうけると、反射的に肺並に心臓の働を調整し、或は全身の血液運動性に作用して、全身各部の血行の調整を促すと云ふやうな効能のある所を見ると、この腹式呼吸が如何に重要な作用を、これ等の神経を通じて全身に及ぼすかがわかるのであります。吾人の心臓が好む働が心臓に與へられてあることを忘れてはならぬ。

腹と云ふのは身の中で最も自由に働かせるべき部分である。上へも下へも前へも後へも自由に働くのは腹ばかりであり、かうして働かせるによつて全身の運動はかまひのであります。もし是を動かさなければ、たゞ血行も悪くなり、神経の働も弱く、アテ部の内臓自身も弱るばかりでなく、肺と心臓とが遠ざかり、弱つてきて、或は浸され易くなる、かう云ふ時には何でも働かせるべきは、若し血液の循環が悪い時は腹を動かすはよく成ります。従つて胃腸の働も、腹式呼吸によつて良くなる。又便秘の人にも良い、一日三日も一週間も働いて便通のない人が腹式呼吸をやれば、今ヤンと一日一回づつ便通があるやうになる。其他消化管弱、不眠症、神経衰弱症、ヒステリー症、等も之を實行すれば治る、かう云ふ大切なものであります。以上が二本先生の腹式呼吸の概の一部分であるが、その方法を簡潔にご紹介すると、

まず鼻より静かに吸息し、次に次第に腹を膨らませるやうにし、腹が固くなる迄吸み、そして少しく息を止めて、次に鼻より呼息する、これをくりかへす、呼吸、吸共極端進行はないこと八分どほりに行ふのである。

岡田式静養法

此岡田式静養法の方法である、岡田式は姿勢の正定と呼吸の整調から入るのであつて、静養は其奥座である。さうして、ゆるぎなく鼻より吸息し、空気を胸に充たせ、下腹部を緩める。而してその息を止むることなく再び鼻より吐息する、息を吐くにしたがひ次第に下腹に力を入れる。一回の實行は少なくとも三十分以上行ふ必要がある。かくて実修を重ねるにしたがひやがて心身一如の境となるのである。

槍山式能力發現法

槍山式は静養法と強健法にわかつてゐる、病弱者には静養法が適し、強健者には強健法が適する。静養法は、中体運動と云ふのから始める、中体運動とは両手の先を、みぞをちにあて三秒間に一回ぐらゐの早さで腰の伸縮運動を行ふ、次は合掌して、福寿円満如意成就と唱へ、尻ら手を上下に振る、そして次は合掌して、目玉を押し、おると字演と感應進行が起るのである、この外、坐式体操、脈膊念禱法、呼吸法、五感感謝等を行ふのである、静養法は静養と植物性神経の活動を起させる。

強健法として、重方元氣法、重方放射法、重方液及術、二刀氣合術、丹田氣合術、九字氣合術等の諸法を行ふのである。

氣血圓通法と簡易操練養健法

氣血圓通法とは始め、原田玄龍氏の発見にかゝり、觀音耳根圓通法と稱されしが大正六年、現在の心霊學、木原居士が耳根圓通法と稱して宣傳せられ、更に健養會、主祀相正雄師の研究により、氣血活動円通法と稱して宣傳せられつゝあるのである。氣血圓通法とは約言すれば、氣は万物の本源にして、心霊と物質(精神と肉體)に共通し、血は物質なれども有機物にして精神と密着不離の關係あり、而して心の根柢は、氣に及び、氣の作用は又忽ち血に影響す。如かのみならず心理の實驗は、氣の作用が肉體に及

一、血の循環を明かにし、ホルモンの分泌は血の調和活動を示すに似たり、また早走の原因説は走者体内に多量な血液は血の調和循環を損じ停滞固結せる原因とし、死は血の結滞循環の途に全く活力を失ふに在り。而して血の調和循環はよくこの氣血を調和に通じし之が活動を旺盛にする法術である。而して此の法術は、第一心氣、第三定力の活用、是通徹に至る要訣である。頭部法、胸部法、腹部法、三丹田共通法等がある。

簡易な養生法は聖道の修行「整體術」の創始者北條新助氏が「整體術」を患者に施して好果を示さるゝに及み、片桐翁が自己にて平素実行し得る方法あらば便利と考へられ、北條氏に懇吸しく考案を得られたものであつて特殊の簡易な運動を重するのである。而してその目的とするところは一、姿勢及び筋肉の調整、二、内臓器の健康、三、筋力の発達、であつて血液の循環を良好とするは凡ての結果である。

哲 理 術 療 法

哲学療法は、真理を確認し、非實在なることを非認するのである。その黙想法は尤の意味のやうなことを思ふのであるが、非實在に因はれることなく、根本の哲理に徹底せねばならぬ。

「神は呼吸の根源にして無始無終の實在である、宇宙は神の表現にして一切のものは神の作るところである。神は全智全能にして内滿無缺である、我等は此神によつて作られたのであるから神の如く全智全能内滿無缺であらねばならぬ、宇宙の一部分たる我に宇宙の理想たる進化向上が實現せぬと云ふはずはふい。我等は神の中に住み、神は我等の中に宿り神と我等は常に一体をなす。神と一体なるが故に神の智は我等を徹へ、神の愛は我等を守り、神の力は吾の活力となり、神の生命は吾が生命の源泉を豊かならしめ、神の光は我等の前途を照し一切の悪を道づけざらしめ給ふ、故に吾は健全である、健康である。健康である。神は決して悪に根柢を興へ給はぬ。故に一切の悪は眞の實在でない非實在である。病は悪である。故に病は非實在である、即ち自己の心が眞理より遠ざかることによつて自ら現はれきたる妄念迷想である、善

一切の病は皆、心の状態にすぎない、いはゆる吾が〇〇は吾の妄念迷想にして非實在である。一切の真理を自覚し、自己の權利を確認する時はいかなる病も朝日に露の消ゆるが如く消滅するものである。吾等は今この瞬間に於て肉の眼を閉じ心の眼を開き迷ひの基礎となれる一切の人間の智識を捨て、生水ならの赤子と心り恐るゝことなく、悲しむことなく、全智全能なる神の力に絶対の信頼を捧ぐ、故に健全は旭日の東天に昇るが如く揚々と現れきたるのである、我等は健全である、健康である、而して安全幸福である。以上は病氣治療の思念であるが愚癡矯正、家内安全、運命開拓、粉失物発見等これに準じて行ふ。自療の場合には正坐して以上の意味の黙想をし他療の場合は病人の患部或は頭に手を接し（或は遠隔も）以上の念慮を凝せしむるのである。

波 辺 式 心 垂 治 療 法

術者被術者相對して静坐し、まづ調息として靜かに規則的呼吸をし心を落つけ下腹丹田にゆるりと力を入れ、息から極めて細微に息をし、たゞ下腹丹田のみが伸縮し外には殆んど氣息の絶へた如き状態であるのである、いわゆる丹田呼吸といふのをするのである、斯くすれば次第に心源の清浄をばへてくるから、今度息を腹八分ぐらゐに吸ひ、そのまゝ推へるのである。その時術者は両手の指頭を患者の患部に押し、その患部を必ず治癒せしむると云ふ力を強く頭に思ひ浮かべると同時に下腹丹田に微妙なる波動の震動を起す、此波動は不自然的に起さうとするのではなく腹力呼吸が妙境に達した時自然に起るものである、したがつて豫め調息から腹力呼吸迄を充分に修する必要があるのである。さて術者の下腹丹田より湧出せる波動は手を傳つて患部に傳はる、この波動感應の持續する時間は二三秒——五六秒の極めて短時間で差支へない。かくて再び呼吸を新にして光波動を起し、治療観念と共に患部に強烈に集中せしめる。これが呼吸式心垂治療法である。尚此の波動感應の際に「エイッ」と云ふ掛声を二三回かけるとよい、之は患者に於ける場と同じであつて、術者の心壁力をその剋服に猛烈に打込むと共に又患者の心壁を一轉させるものである。

藤 田 式 呼 吸 療 法

一 84 一 養子式呼吸法は(調和道、藤田重香氏の方法にして藤田式息心調和法といふ)前述の岡田式や二本式と同様やはり呼吸法を行ふのであるが、その方法は正坐(八方法は既述のもの大差なし)式は椅子に上り、まづ呼吸法から始めるとやり易い。その方法は吸息と共に下腹を張り、そこでうんと下腹に力を充たせ、鼻からソツと極めて軽く少しづつ息を洩らすのである。そして港へ居る時同様に丁度自分に適当した程度に止め決して無理にこらへてはならぬ。そこで呼吸の方法はまづ鼻から極めて徐々に息を吐き出すのである。初めの内は下腹を張り出す心地でそのまゝ持續し吐きだすとよい、すると下腹は次第に凹んでくるのである。その次は鼻から見又極めて静かに空気を吸ひ込らば下腹を前にふくらすやうにする、吸気の時腹は息を呼く時の約三分の一ぐらゐの時同である。又吸気の時に少しづつ骨を助骨(あはら骨)を静かに上中横に横切るやうな気持で行ふといふ(似し肺助骨等に熱のある人は見合せたかよい)この呼吸をせ分以上行ふ。而して適宜の時腹を經過したならば都度呼吸に拘る。その方法は下腹に力を入れ、膈部以上にも亦以下にも気の滞りなきやうにし、細く長く静かに自然のまゝの呼吸をする。この時下腹の力は絶えずそのまゝとし止ませたり凹ませたりしないのである。以上が藤田式の骨子である。

リズム療法

本岡哲三博士三葉田仙堂氏の指導によるものであつて、氏の説によれば、呼吸には定律を有する波動状の不斷的活動がある、これをリズムと云ふ万物の生成化又はこの動律の作用によると云ふのである。而してリズムは呼吸に充満してゐる呼吸の絶対意識であつて我々は平常、自己の意識を揮ひ捨ててこの絶対意識を迎へられる時は何事でもなし得ることはない、この力を病気の治療に用ふるのがリズム療法である。このリズム療法を行ふにはまづ術者自身のリズム力を研んずるために次の如き修養を行ふ。
 袖前又は佛前に坐し両手は合掌し中指のつけ根の所にのみ少し力を入れ、深呼吸を五十四回行ひ精神の洗一を四回繰り返す態度で、我は呼吸、呼吸は我、我と呼吸とは渾一不二、融感として合休す、と唱文すること三回、凡ての雑念を去り眼目のまづ前方を凝視する、而して前方に光明を凝め得るに至つたならば

修養はできたのである。この力を以つて、治療を施すのである。(岩澤法を修養に付添する)

大坐蓮坐子術療法

八頭命伝書に「ワザニ子術の修養せらるゝ、蓮子術は是を分つて二つとする、即ち運動作用と滑動作用である。さて運動作用は、座して行ふ臥式、立つて行ふ臥式、臥して行ふ臥式、任意式に隨せず行ふ自由式があつて各式にも亦それ、式手を合掌したり呼吸を伸したり又曲したりする。今座式を述べる、まづ正坐し膝は左右とも上げやうとせしむる状態が必要である。次に両手を胸前一寸程の所に合掌し、指は密着し掌の外周部に力を入れ中心に軽く力を入れ、全身重量を足と膝を線かへすのである。すると全身重量十分にして指頭を微かに送り遂にそのまは前後に動き、上下動にまじり人によつては坐したるに全身がホソく薄くなる、この状態に入れば一時間にやると起り易い。其他何式でも要するに合掌して手は動くとの状態は、これは動くつてゐる。

の滑動作用とは運動作用の如く肉體の動が前に蓮子の運動のみを他に傳へる法である。此法を収得するには、滑動作用は云ふのから始まる。さてこの力を修養するには蓮子板と云ふものが必要である、蓮子板とは杉板の端、長さ一丈七寸五分、厚五分の長方形の板と云ふのである、さてこの板を一枚だけ机の上を板の上に恰度、板を一枚、うゑ隔てた心持でまゝ早に持してゐるのである。すると蓮子の作用によりその板が前後する、一枚の力を二枚重ねて試みる、其後それは百枚やら重ねても行ひ得る、この滑動作用を得るに至れば、病氣治癒の意があるとなふるのである。この作用を相法、押擦法、凝望法、凝視法、吹息法等によつて病氣治癒に傳へて治癒するの如き蓮子療法である。

自動療法

一 85 一 色々の形式があるが、要するに患念を断ちかり、今自己の手は巧に動いてよく病氣治癒を惹き、と自己踏不すれば自然に手が動いて病氣治癒を叩いたり驚いたりして巧みに治療するのである。

人身マカネツト療法

このことを言ふ又は黙するものであつて、その態度は特に精神を凝集しやうとせしめ少しホシヤリとした時に
行ふのが効果大であるといふ。呼吸法は深呼吸と呼吸、止気の三つよりなつてゐる、而して坐
式又は臥して行ふのである。本法は自己治癒法として中々親切な細かな方法である。

対症療法

病気の進歩は病の毒を止めることである。例へば肺病患者があるとする。するとその患者は自己は
肺病であるとの不安観念が四六時中行住坐臥総て頭にこびりついてゐるものであつて、これがよろしくな
い、するだけの手あてをせよとならば、いくら思つても、なるやうにしかならぬから、不要の心労は止める
がよい。いかに病が重つても死の以上のことではないのだから、斯く心を決して病に對する不安心を除くに限
る、而して此の死の観念といふやつが中々さう長くできないものでない、ヒヨツとすると又しても病に對する不
安が出るのであつて、だから、散歩、登山、釣、遊園、活動写真、甚だ、會話、病者の好むことを
して心機を他轉するやう努めるがよい。病人に面白くものを見せ、愉快なことをさせ、或は好む料理を喰
はせ、適宜に運動をさせる。病者を慰め喜ばせるのが、病者救済法である。

精神の結合療法

本法はウインナーの医師、ヨゼフ、プロキエル博士によつて今より八十餘年前に於て創見せられたのである
か。そのプロキエル博士の門下にプロキエル博士が居て本法を大成したのである、本法は現今旺んに行はれつゝ
あるが、是を約言すれば、患者を催眠状態とし、或は又催眠状態とせず、病人を平臥させ、目を合じ外來の
刺激を遮断し、病氣の原因について思ひ浮かぶことを許らせるのである。如何に不愉快な云ふかたいことでも
かくさかすかふまことを思ひ浮かぶは意してよく、そして一つのことか思ひ浮かぶとそれに續いて思ひ出すことを云
はせる、そして次から次へと云はせやら遂に理想を達するところまでさかなくならぬは御法として前頭療法と

法を行ふのである。

この療法は、老年になると過去の追憶が困難であるから四五才迄ならぬが適当である。又その病的観念は
病人にとつては甚だ口外しにくい不愉快なものであるから大抵秘傳を守らう、発見せられぬとする傾向が
あるから長期日に亘つて根氣よく施術する必要がある。又術者はたゞ單に病人の云ふことを聞くのみでなく
その言葉の氣息の具合や高低の具合、云ふとよむ具合、急に笑つたり、或は泣いたり、赤面する具合など
を細察に注意し病人の隠さんとする所を見出し、その病源がわかつたならば其原因とぶりしことを思ひ浮か
ぶらせるのである、すると其意なる精神の元素は消滅し健全なる元素のみが化合合成して健全なる精神と
なるのである、精神健全なれば肉體健全になるは白明である。

神仙術療法

神仙術療法とは神仙的修業をつんだ人、即ち人跡稀なる山中に庵を結び、熱情的生活を弁け、火食物を断ち
その奥堂に住したる人は何等食物を探らない、かつて本會へ此種の修業をつんだ人が尋ねてきたが、その靈
力は実にスバラシイものである、而し餘程の大決心がたいと駄目だぞうである、その人は山中に居る間、最
初の内はそれこの水で練つたものを食し、その後松の木皮をとり其生木に傷け、その切口より湧出する
松脂を食してゐたとの話である、裸体になつて見せてくれたが背中あたりは昔湯色の松ヤニ色であつた。
さてこの神仙術療法は別に一定特殊の型式はないが、多くは病者群を手に撫でるのみで治るやうである、
又、エイツと大鳴したり、吹息することによつても治る。

透視術療法

透視術療法は透視能力がある人でないといふ。患者に接するや直ちに病源群を要感し、或は治療しつゝあ
る手が病源群に吸ひついたり、又冥冥中病人の姿が現はれ病源のみが思ひ見たり、其外色々の手袋で病
89
の透視が行はれる、油且つその治療手段も透視によつて分明する、此病源は何の業りであるからとつすれ
ば治る、何の木と何の草を煮じて吞め、どの方向から医者を迎へよなどの類である、且つて著者の知人があ

一人の肉體の發見線程に及んだ處、その人の助骨が虫喰みの如く傾けて居るやうに見れるとのこと、及び人なことが絶河にある等は、いと皆云つてゐた處、後年それが事實であつたことが分つた。術術大家として定評あるは佐領の才久辰三郎翁であらう。

人身自由術療法

精神療法の大衆として有名なる沃口熊鷹氏の方法である。沃口氏はもと一漁師であつたが山中に修業をつんで此能力を得られたさうである。而して沃口氏は全國各地に於て大抵一二日間ぐらゐづつ施術し全國各地は勿論米國にまで渡り、摩訶不思議の奇蹟を演ずる。眞言秘傳人身自由術なる名目のもとに施術した、所が一時は彼れの評判は大したもので、代の行く所洪水の如く病人が殺到し、生神様として崇められ巨萬の富を得られたさうであるが、遂には司法當局の怪しむ所となり何回となく法廷に呼出されてその眞偽を試験されたが氏は幾多の人々の前で裁判官の指定せる病人を前に置き、印を結んで、パーパツと大鳴すれば、おざりが立ち上り、二イツと一声盲人の目を開いたり、パーパツと一喝のもとに歯を抜くなどを行ひ、居並ぶ判官連中を驚嘆させたりしたとのことであるが、代の行く所療法もやはり氣合術や暗示術の一種であるが、神に祈禱を捧げて行ふ所が異なるのであつて、神に祈禱を捧げて行ふと術者並びに患者の精神が統一し易いのである。その他の色々の秘事もあつたが大體右のやうなものである。

拳證説得療法

本法はツウゴア氏の創始になるものである。既述の精神療法の外で言つた如く、自己の妄念迷想によつて自己の思慮を失たひ、爲に自分病氣を作る人が少なくないが、こんな人にその病氣の根本的理由を説明し又的になる例を挙げ以つて患者に自覚せしめ、患者自身の精神により徐々にその病氣を治してゆかうと云ふのである。だから術者は相當に術道を研究し充分その材料を持つことと必要である。尚説明は主観的とするよりも客観的に物切な例を挙げてやる方が解し易い。

聖智學問秘傳療法

此法は西歷第三世紀アンモニヤス、サツカスといふ人が創始したものである。そしてシオソフイ(聖智學)とは神聖なる智識の科學と云ふ意味で、オツチチチム(秘傳教)とは聖智學の秘密的方面を教へさせたので物質的及び心靈的の自然界に覆れた秘密を信じて之を行ふ故である。したがつて現今の科學を以つて充分説明し得ぬから迷信視され或は荒唐無稽ともせらるゝやうな不思議の術である。本法は秘傳に附され、あつて分には秘傳傳へられていたが今長を簡潔に云へば、本術を修行するには物應の親心をもち、またさう何人も兼つてあげやうとの熱心なる精神を養ふことが必要である。常に神を礼拝し自己精神を寧ろ交し同化し得るやう修養をつみて後進者と着手するのであるが、法を修めようとする人も精神の念厚く法を信憑せる人である。果偉大である。治療方法は多く病態部に手をあて術者の統一したる念力を以つて中庭堂を傳ふればよいのである。

暗示術療法

此法は催眠術の一種である。人云ふ迄もかくて原知であらう。催眠術を正坐せしめて置いて、君の病は治つたと云ふことを、既に説明したところの暗示術によつて暗示すればよいのである。如何なる名匠名薬名器も暗示の力によつてたおさめておること云ふ迄もあつた。

熱湯療法

昔は前述の暗示療法の一様である。湯に手を入れれる方法を練習し、相當にできしをたらば、普通人の湯も入れ得ぬ位の湯を器物に充たし其中へ一枚のタオル(手拭)を入れ、術者は湯蒸る熱湯をもつて二イツ三イツの割合と共にタオルを手に取り熱湯を注ぎ、熱くないと暗示し、熱湯の熱意部に湯布をあてるのである。單なる熱湯の如きは一回で済む。又熱湯中に手を入れたと云ふ不思議な暗示となり通つ術者の湯下から出る熱湯、病は治つたと云ふ暗示、熱湯の刺激が初を奏するのである。

まじたま療法

是れも暗示療法の一様である。本會は解して居る、即ちまじたま行ふ人の神業なる態度、

自分は〇〇のまじないをうけたからのになる、との自己暗示の作用である(勿論例外はあるが)凡て暗示は大方の心に強く喰ひ入るやう矢へなければならぬ、場合によつては何か何々のまじないによつて貴下の病気を治して上げますと、まじないを方便として暗示して偉効を奏する人もある、したがつて其まじない方式もアーメンと唱へ乍ら病所をなだめて、或は又はナムアマミガムツでも南無妙法蓮華経でも或は又或は其まじない方式(呪詛)もよい。自己の場合も、歌や舞、要符に靈的意味を含ませぬこともよいが、多くは自己暗示によるのであるから念力感應術の方が有効であると考へられるのである。

氣合術療法

被術者に正坐、又は平臥、椅子に背らし、時計の音をかきかへさせるとか、深呼吸をさせ(何もさせない場合もある)、呵々の呼吸を見計み、—— 呵とはアーと息を吐くこと、嘔とはウンと息を吸ひ込んで、そこで先方が息を吐いた時に術者は吸ひ込んで、先方が息を吸ひ込んで、先方が息を吐いてしを吐いて今正に吸はんとする時、吹エイツと打込みるのである。—— エイツと一聲し—— 二声、三声、四声する法もある。—— すぐに、君の頭痛は止つた、もう決して痛まないと暗示し(曲痛の例)再び丹田を敲つてエイツと腹を叩くするものである。

縁動無想療法

此療法はグリーゲンゲル肉の考察になるものであつて、何處にでも有効であるが特に神経衰弱やヒステリーヒトコンアリーなどの機能性神経症に有効である、その方法は病人の趣味をもつ仕事を害にならぬ程度にさせるのである、そして心身をその仕事の方に集め病に対する妄念を掃み以つて健康体に復しやうと云ふのである。注意を要するのは過度に腦を刺激したり競走心を起すやうなものは見合せることである。

空 心 療 法

本法は善悪業の情をツツしみ、なり来たもの心で周圍自れ一切に開せず、何等かある所もなければ反する所もなく精神の発動を大自然に合せせしめるのである、が中々困難の方法であるから到底普通社会では

なし能はぬから山中に隠れも結んで行ふのである。

プ ラ ナ 療 法

プラナとは印度哲學上の言葉で云へば生力又は靈氣と云ふことに該當し宇質万物の本源をなすと云ふのである。そして何人と雖もこのプラナは所有してゐるのであるが其所有分量は多少があり、此分量の多少は其人の強壯、病弱をあらす、即ち人体にプラナが充溢して居れば健全であるが、若し此プラナが欠乏して居れば不健全であると云ふのである、而して我々は日帯絶えず此プラナを吸収してゐる、即ち呼吸により、或は食物より水からとこのアルナを吸収し、腸髓又は其他の神経中枢に之を蓄積し必要に応じて身体各所に供給しつゝある、そしてこのアルナ療法は特殊の修養により各自の所有するプラナを増加し、且つ此プラナを他人の病患部(病氣)に即ち此プラナが健全してゐるのである、健全して居る所に術者の身体に充滿せるアルナを注入する)に傳へて病氣を治すのがプラナ療法であつて、このプラナを傳へる方法に三つある、即ち第一は手療法と云つて手から傳へるのである、いよいよ施術に際して手から旺盛にプラナを流出するには、両手を摩擦し或は猛烈に手をうち振り、次に手を固く握つては開きするのである、そしてプラナは思念に依り或は精神の統一中にも流出するのであつて手傳從業法、手傳橫断法、指頭迴轉法、手傳聖乳法、手傳授手法、手傳聖打法、手傳按摩法等各適宜の方法によりプラナを傳達するのである。第二は氣吹療法であつて吹息によつて傳へるのである。其他、凝視療法と云つて目から傳へるものもある。

以上にて於て各派の方法を大分列挙してきたが未だ々々以上の外にも沢山あるが到底全部を掲載することは不可能であり、且又大同小異のものが大部分であるから今回は是にて擲算する、諸氏の真鍮ある比判研究を望む。

神の靈現象の研究

第三章 心靈現象の研究

◆ 神 秘 の 解 決 ◆

宇宙万象は一大神祕にして同時に吾人に眼前する一大事象である。古往今来、科学者、哲学者、宗教家、等は何れもこの一大事象に対し各方面より何等かの説明を加へんとしたのである、而して今日迄に是等各自の發見したるところの微妙の神祕は、即ち眞理なる個々の事象の一端である。この事實を綜合して解説したものが釋迦にあつては六藏經八萬四千の法門となり基督に於ては一巻の聖書となる。換言すれば佛敎もキリスト敎も其他の宗教も哲學も文學も美術も、將又自然科學も精神科學も、皆這の神祕を説明する一種の形式であつて、共にこの一大神祕、一大事象に対して解説を試みんと努力しつゝあるのである。

◆ 迷信の發生 ◆

而して是等の、宇宙の神祕、人間の靈妙と云ふ大問題を研索せんとする上に於て是等の意味を正しく理解する者には、そのまゝ正しき神祕、靈妙であるが、神祕の片影を捉へて是を私意私慾の爲めにする目的を以つて、蛇足を牽強附會し應用される時は、正しき信仰に向上せよと急ぐに向下墮落して迷信の巢窟地獄に沈淪するのである。

世上には往々智識を以つて一流を誇る者でさへ迷ふ鬼信に惑はされ溺れることのあるのを見うけるが、是は吾人の注意を要することであつて、教養、能力の低い人が殆んど取るに足らぬ迷信に流るゝのは考へやうによつては其人の境遇が氣の毒にも憫むべきことで、さほど怪しむにも足らぬが、苟くも多少の學問の素養があり社会的に上流の地位を占むる者が、明かに今日の文化生活、科學智識から見ても有餘存りと認め得べきことをマシメと信ずると云ふは聊か不思議な現象であるといふわけはなかるまい。而しよく考ふる時は、是等の一人の多くは、ある専門的の智識學問に熟するの餘り、それ以外のことには却て普通人よりも狂遠であり、いわゆる常識が円満に発達して居らず、心靈問題、宗教とか信仰問題、宇宙神祕の蘊奥の消息等には小兒のや

うに軍潮がある場合がある。物の判断を総合的に推理するの能力に欠くの結果、因らかも是等の迷信に陥るのではなからうかと考へられるのである。就中是等の諸問題中特に

◇ 心 靈 問題 ◇

の如きはやくともす水は不要視せられる。然るに、この傾向があるが、是はまた重且つ大なる問題である。古来より哲学を論じ、宗教を論ずる人はあつても此問題は未だ満足な解決が得られておない。而して一般世人の此問題に關する見解も極めて不熱心な偏見動機なもので、或人が「およい」と物理的の術を行つて、その靈の作用をなすと云つて、別に研究しやうともせず唯靈を説めるに汲々たるの者探である。

而してこの心靈問題も近代に至つて唯靈論者や學者の手により著々研究の歩を進められつゝあるが、而しまた此者の中には本問題が一見不可解の観ある故を以つて一種の精神病者の奇現象にして一切研究に備せぬものと考へ、甚しきに至つては、不思議、奇怪の故を以つて其事實の存在を否認せんとするのである。或程心靈問題中には現代科学乃至は普通常識を以て一寸判断しかねることもあるが、而し奇は奇であつて事實である。不思議と云ふ言葉は、ただその道理が不分明であることと云ふだけのことであつて事實の有致を又ひ現す言葉でない。實際今後の社会に立つ人としては此心靈問題の研究が極めて必要であると思ふのである。かつて茲に科學として特に本問題を附記した次第があるが、もとより之を詳論すれば別に一大冊をなすから、唯單に現代靈界に行はれつゝある諸現象中の著名のもの二三を雑念と列記してをくに止め、本曲は他の参考書について研究して頂くこととする。

◇ 欧米に於ける心靈現象 ◇

(一) 空中浮揚現象。心靈作用によりテーブルや其他の物体が空中に浮き上がる実験であつて、英論者、佛的現象である。此現象も最も靈敏に実験せられたのは、一九一五年から其翌年にかけて英國の機械學者クロフォード博士によつて行はれたもので、テーブルは床をはなすこと、或は吹に運した、其詳細は同博士の著作にかゝる可也、リアリテイ、オプ、サイキック、フエノメナムと題する書中に記述されてある。

(二) 超物質化現象。是はある物体が一且超物質化して壁や柱を通過する現象や種々の事例があるが、若しよく行はれるのは、指輪を靈敏の條に縫ひ込んで置くに靈敏も然らず又縫ひ直さず縫ひ直して忽ちその指輪が取出されるのや、小物箱が空のや、壁を貫き通して内に入り行くこと云ふやうな実験である。独逸サクソニー国ライプツヒ市の大學教授ツエルネル氏が細心の注意と靈敏を以て奉行し同様の教授である世界的大學者エヒネル、ウエーメル、シヤイアネル諸氏が各々見せられた同実験の如きは即ちも疑をばさむべき餘地がない、而してツエルネル氏之を解説するに第四卷を以てしてゐる。

(三) 物品引寄せ。これは遠方にある指輪、石、花、鳥、靴、魚、などを実験室内に引き寄せせる現象で、靈敏を動かす眼に見えざるもの、働きのあること、而して右の物体が引き寄せらるゝ場合は或程度に分解して運搬され、実験室内に運した時に再び原形に纏められるのであるが、鳥や靴は之がために格別苦しい状態をなく、幾分眼をせばす風味があるといはれてゐる。此現象も各所に於て精察する実験を経て居る。

(四) 靈界写真。これはカメラを用いて撮るものと單に暗室内に於て乾板を靈敏の手に持つて撮るものとある。住々死者の肖像がフリン、と乾板に現れるのを死者の生活、靈魂の存在を証明する最も的確なる方法とせられてゐる。尚今日では靈界は暗成するものであることと證明されてゐる。これは彼の今名著であるリシエ教授の研究によるものであつて一冊「フリン」を著してその事實を述べた。又「ミイラ」や「カ」リントン等の報告書の中には明かに靈界の事を書き記されてゐる。この靈界写真が詭謀にあらざることは裁判官も認めることである。

(五) 自働書記。靈敏の手が本人の、意志以外の或る見だかす方によりて動かさるゝ現象であつて、完全に見達せる自働書記の産物にありては住々靈敏すべき靈界の消息を傳へることがある。

(六) プランセット。これは前述の自動書記と同様であるが、磁石を使用するのである。プランセットとは幅五寸長六寸厚二寸五分内外の板をハート型へ磁石の形に作り、その一端に鉛筆を挿入する。次に作り、脚の円滑自在の滑車を附したものである。今机上に滑かなる磁石を動かさぬやうにし、その上にプランセ

177
ツトに鉛筆を挿入したものを精神統一してゐると、プランセツトは自然に動いてきて文字や絵、符合に
よつて豫言するのである、天候でも病氣でも何でも註文に依りて豫言するが特に空の現象と女の問題はよく
豫言する、今改米で大流行のものである、我が國にも別家まで流行してゐる。

(七) 卓子傾斜。これは我が國でもコックリサンである、最も完全に行はると時は手をふれおとも卓子
勝手に動き又其威力も驚くべき程度に達することありて之に依りて可成りテールが破壊することあります

これは人体より迸出する動物磁気、磁石作用等によつて行はれるものと解されて居る。

(八) 空中拍音其他。軽きは棒にて叩くが如き音響から重きは爆弾の破裂するが如き大音響を發し、又
火焰が動揺したり、バルが鳴つたり、コツアが動いたりする現象である、通常人体から相出せる一種の又ネ
ルギーと靈媒の心靈作用によつて行はれるものであると解されてゐる、以上は何れも客觀的現象であるが、

主觀的現象としては次の種類をかかへることが出来る。

(九) 靈眼。靈媒の修行を加へたる靈媒が統一状態に於て的靈と接觸したり、靈界の冥状をうかがつたり、
物体を透視したり又空想を通過して遠方の物体を認めたりするの類である、修行次第で死んど總ての人は多
少此能力を發達することが出来る。

(十) 靈言。肉體の感覺が蓋蓋された場合に自己以外の或る力が發聲機を操作する現象が、全々本人の意
思と離れたることを語り、又その声音もある程度本人の平生と異なる(後述の文靈法の所参照)

(十一) 精神印象感識。物体の上を刻み水たる過去の現象を感識する能力である、ある人の所有にかゝる
指輪、時計、刀劍、衣服等には、その人の時々の思想なり感情なりが、宛かも書音の磁石に於けるこ
同様に刻みつけられて居るのである、斯道の達人は過去数十年、數百年來の歴史を極めて明確に察せ感知
せらる。

(十二) 讀心術。互に隔離された人と人との間に意識の交通をする現象で、ザンチツク夫妻間の讀心術は甚
だ有名である、尚人間相互に行はるゝのみでなく人と靈魂の間にも行はれるとのことである。

(三) 靈的療法。これには種々の方法があるが、第一は靈眼その他の靈覺によつて疾病の許分を透視し
治すの療法の治療方法をも示すもの、第二は靈媒の體內から發する動物磁気、その他靈界並に物質界より
抽出したある力を活用して医療の目的を達するもの、その外、祈禱、感謝、斷食等を行ひ純潔なる生活を
送ることによつて目的を達する方法である。(本編、第二章、参照)

右に列記した以外にも尚幾多の現象もあるが、以上で大体改米に於ける心靈研究の概要をうかがひ得るこ
とと思ふ。而してこの目的を達せんがためには、それや此靈媒の方法が講せられ、英米佛の諸國に於て
は何れも心靈研究協會が設置され、そして、各自靈媒の培養に努力したり、優良なる靈媒を保護養成した
り斯學に關する機關雜誌や旅行書籍を刊行したり或は実験によつて新事實の發見と努めたりしつゝあるの
現状である。

◇ 我が國に於ける心靈現象

(一) 千里眼。念慮、其他の現象。我が國に於ける諸種の現象も大体改米のものと同違ない。
先づ改米諸國に比して透視があるは遠慮を次第である、而し近來篤信なる學者により着々研究の歩を進め
られつゝあり其等の諸問題に対しても漸次明解なる説明が附されつゝある。是等の問題に對する説明の
大畧は既に各項に於て説明したからことには省略して置く。

(二) 降神。靈天靈、靈靈の現象。此現象は我が國古來より存在し現代に於ても此現象は各地にあ
る。現在我が國に於ける學者の説では大体二個に分れて居る、即ち一は是等のことは疑ふべくもない事實
であるとし、今一個の説では、是等のことは変態心理作用にて人格の交換、又は幻覺錯覺から起るもので
あると云ふのである。それはさて置き、今所論の降神此現象を靈物の種類によつて詳論すれば、

第一は昔久しく土中に埋没せる古鏡、古鏡、又は先祖傳來の古い武具、古い人形など靈生物の靈がついたと
云ふのであつて、是等の靈がつくと全く其人の平素と様子が變つてくる、恰度催眠術にかゝつた者にお前は
だと言へば其表情をするのと同じである。例へば古鏡とか古鏡とかゴツツけば大抵その故事未だ永々と語

り、多くは強して撃つて頂きたいなどと云ふのである。そして其後、その前に指すものである。第二は、神社傳説の由緒を尋ねる古本、金蔵、草花などの種物の聖がつくと云ふもの、第三は動物聖がついたといふもの、是は我が國に於ても各地に多く見る現象である。就中、狐、狸、犬、雞、兎、牛、馬、蛙、蜘蛛、羊、等はよく知られてゐる、而して長年の動物聖がつけば是又大へん異状を呈してくる。熊の相棒が物すくなくつたり、食物に嫌さうみかできたり、神傳の語、世界の語、など豫言めいたこともやる、又人を病氣にするだけの者もある。大の悪霊のため人畜をなめる人、猪の悪霊のため奇声を發する人、狸の悪霊のため夜明けに奇声を發する人、狸の悪霊のため眼病を煩へる人等、中々沢山ある。第四は人間の霊が憑依すると云ふのである、これには正霊と邪霊とあるが、是又その其人(聖)のみしか知らぬことを云つたり行つたりする。

第五は人間以上の靈、即ち神と云ふか云ふものが憑くと云ふのである、さて是等悪霊の聖が人間に憑依すると云ふと、その人の態度や言動つきなどが如何にも神さまらしく傳さうと云ふ、豫言めいたことを云ふもしたり、又お使先と云つて欲に色々豫言の言をたまはせたり、繪や歌を作つたり、むづかしい古語や外国語を巧みに採つたり、病氣を治したり、いろ／＼不思議さうなことをするので普通人にはどうしても神様がのりうつられたものとしが思へない。

第六は自ら如く憑依と云ふことを認められて、且つ如何にもこれは不思議だとなつてきた以上、世人が自らすすんで、神聖な聖の聖を呼ぶ出して、其加護や、豫言にあづかりたいと望むのは寧ろ當然のことだ、こゝに降神術なるものが生れ出たのである、各地によつて名も異なるが、巫女、荷籠おろし、神おろし、お大師さま、などと云ふのがこれであつて、西洋で云ふ靈媒などもこれである。

◎ 現在 修行者の 行ひ、ある 奇現象 ◎

(一) 發芽術。之は意志の集中と呼吸法とに依つてプラナを活動せしめ種子を速時に發芽成長せしむる術である。まづ術師は一個の種子を土と夫に手に握り、寸時呼吸法によつて意志を集中し、プラナを種子

上に注ぐ。すると種子は次第に發芽し根を生じ自然の發芽と異なる所がない。是は印度の靈能なる現象を経てゐる、尚又魚類の卵を此の方法で僅に三十分にして孵化せしむること西院石中であるといふ。

(二) 沸水術。これはプラナを應用するもので術者無物に清水を盛り実験者何等の流計のないこと試験せしめ、それを両手に捧げ、交律的呼吸をなす、精神を集中して水中に一種の勢力を注入する、かくして寸時すると水中に微妙なる泡沫現れ、漸次に液を沸かす泡沫しつゝある湯と変わりがない。此実験も又精進なる試験を経てゐる。

(三) 幻鏡術。術者は鏡をとり、その一端を鏡で空中高く掲げると鏡は次第に上つてゐつて、遂にその先端は丸へなくなりて端は地上に落ちること二三尺の所に落ちる。恰も鏡を鏡にでも引かけたやうになる、而して最も年少なる自體之助手を其鏡に昇らせるのである。

(四) 大地出現術。まづ術者は外の平地に於て繩を懸け、繩を引いてその周囲を圍み突見する、此時助手の少年は、繩を引いて大地を鳴らすのであるが其は草類なる依音で觀衆をして眩氣を催させるものである、尚此音に和して術者は呪文を唱へる、かくして長時聞たつうちに觀衆は昏恍惚としてくる、此時助手の少年は豫て用意した繩又は箱等の中から數匹の小さい毒蛇を出して放つ、すると毒蛇は者繩に伴ひ東に這ひ廻り次第に繩を離れ、且つ身最も速く遂に繩に懸けたる大蛇となり觀衆の方に這寄つてゆく、次に術者が手を動かすと次第に繩が縮んで、遂に繩を縮めてしむるのである。

(五) 幻蛇纏術。これは術師は、はなはだ同様の方法を以つて繩を蛇とす術である。

(六) 空中浮遊術。之は修行者の行ふ浮遊のうち最も上位に居るものである。行者はまづ直立し、次第に身体を傾け、曲げ、その前後を地より離して上へ、恰も空中に横たはるのである。そして觀衆の頭上を浮遊させるものである。是には又靈能の小さいものを放つて長を術者の意のままに浮遊させることもある。

(七) 幻芝果術。是は印度修行者の多く演習するものである。さてその方法は、先づ土を盛り、その土

……開講の辞……

本館はもと本會の雑誌として特選の會員のみな望む所のなるが所定雑誌の命置によりこゝに講述することとせり、前、今、下の三篇につき其の雑誌を得られし方は遠慮本懐を用せらるべし、如何に極意秘訣と云へども、よみたるのみにては阿の初果もなきこと論式を熟知のことならん。一つの事実行こそ必事なり、いかに學問なる學識ありとも修養を介して理想の功を上げることには不可無なり、その身たとへ無學の田夫野人と云へども、その修得よろしきを得ば理想の功を収むることを得。なせばなる、なきは成らぬ、何ごとも、たはれば人の善きはなりけり、よい哉此言。

第一章 催眠術極意

本章に於ては普通の催眠法(上巻に詳解せるもの)にては入道困難とする者の催眠法を述べんとす、勿論普通の催眠法に於ては、これは其の適用にすぎざるも、未熟の人のご敬務までにと強に各種の特別催眠法を詳説することとせり。

(一) 賦れる人の催眠法

睡眠中の人を、そのさう睡眠状態より、催眠状態にする方法を述べんとす。まづ被術者の眼につく逃に、今日は君の眠れぬうちに催眠術をかけると思ひ告げをきて、さて術者は被術者の眼を閉すを見計らひ、被術者の眼を動かす(極めて静かに被術者が目をさませないやうに)被術者の眼を見せしめし、彼の耳に口をよせ、〇〇サ—ンと吹くかやくやくに強かに被術者の名を呼ぶ、一回で無効なれば二回三回と呼ぶなり、如何に名をよびても起きざる時は被術者の眼を、やわらかに押へるなり、かくする時は被術者はウウ……と少し息をかけるものに付その時——カ—パツと目を閉じて起きるが初きことあらば、彼の身体を静かに押へ指や目を開けてやり来り——カ—パツは今たいてん賦い、こ

から私が催眠術をかけます、サ—パナタは今よく眠る、而し眠るにしたがつて私の云ふことは蓋し入つて耳に聞かせるやうになる、サ—モ—カ—つてきた、眠るにしたがつて私の云ふことは蓋しよくきこゆ、今私が貴君の手を三回なると、その手は重くなり上げらるべし………本法は被術者の睡眠中に行ふものに付、術中に際しては立會人を必要とす。

(二) 反抗せる人の催眠法

反抗者を指導する秘訣としては第一に反抗心を除去することが必要なり。反抗心さへ除かれば、あとは普通の方法を用ひらるなり、尚少し強弱しく如何にも究方の心を透みたる態度を以つて催眠すれば有効なり、さて被術者に、少し程催眠術は反抗しては駄目、催眠にかかるとか知らぬと心の心を透させ手練にニッあり、一つは反抗者に催眠するに法、催眠に先立ち、よく眠る人さかひけつを見せるなり、如何に術を疑へも眼裏に眼裏を見るときは容易に入行するものなり、今一つの方法は暗示を以つて反抗心を弱みに除く方法にして、今其の一例をかき、催眠は反抗しては駄目、催眠にかかるとか知らぬものと云ふことをさし、それを真実と思つて居るのでせういのでせう、誰かに催眠術は反抗するとか、知らぬものと云ふことをさし、それを真実と思つて居るのでせう。而し実験の催眠術は決してそんなものではなく、むしろ反抗するやうな活潑な心の持有者はいへんか、易いのでせう、君がそのやうに反抗して居る時の方が初めて好都合たのです、………と云つたやうに………

(三) 遠國に居る人にかける法

この度の風流は遠海のものなりとの観念を心に抱く時は普通遠海にいくはしても意志に守ずることあり、此は要力あらたなる物なりと云へば遠海念の念生じ、得たなき古人の事なりと云へば何となく價値を感得し博士とか大學者とか有名人の言論をきき、それかたとへん説きなりとも心に思ひかき、名論卓説と云へども其年遠海と名を感得の口より出でたるものなり、………遠海念を興へず、………遠海に居る人に………杖の八かき見え、………遠隔地の人に催眠を施すには、………被術者はその手段によりて自己暗示を起

し催眠に入り、后に記者が最近ある人に受けた一丈をかくつてご女君に供す。

前著の催眠の究極の増進の要諦を述べた件正に承知致しました、この上は金量力をこめて施術致しませう
ついでに来る十五日ヨリ廿五日まで十日間施術致しますから、毎夜九時前後に、なるべくしづか
やく静かに、寝るやうに並つて、深呼吸を四回して眠れしづめ、自分は今遠隔催眠をうけつゝあ
る、と小さく囁くこと二十回、其後はそのまま、瞑目してゐると、やがて術力が感得してなんとなく
アタクの頭が前に傾くやうなやまいになります、そして次第に頭が下つてきて遂には頭が床につい
てしまふから、その時を術をさめたので、術からさめてからはたいへん気が持がよく頭がせい
致します、そして術にかゝることに親徳力が増進してきます、
別便をもつて本会の会報一冊お
り致しましたら、ごらん下さいまして、何に術力が偉大であるかをご承知下さい。 後 畧

（四） 催眠術

他人の催眠するを志す自己も急に志願を催し、人の流行物と云ふものは自己も志す所持したく思ひ、
なる所願、人の入る活動場を見、しらす知らずの裡に自己自身の體動するが如き、これ人類の
倣性なり、これを花地に應用したのが、この催眠術なり。
術者と被術者、三尺杖の節を立し、最もせじめの間をもちつて目と目を凝視しむること十時、被
術者の精神沈滞となりたる時、術者はしづかに左右の手足をスツツと上ゆるへ横にんとす、すると被術者
も其の精神沈滞となりたるが如くスツツと手足をゆるゆるのなり、其他頭をかけた頭をさき、顔に手をあて水
回びく手をうつる、一不然の時は耳がそのまゝ凝視を行ふなり、注意すべきは矢張り、面白半分
たるには笑方のはたき、集中すること不可成なり、
（五） 瞬間にかける法
前著をもつて充分に被術者の催眠作用を商め、君は今僕がエイツと一声すると術にかゝる、術にかゝる

（六） 藥物應用催眠術

忍ち目を閉じ少し頭が下がるやうな気もちがして眠いやうなウツツとした状態にあると暗示し、必ずかゝ
るべしと念じ、被術者の息を呼き終りたる時、下腹丹田をしばつて、エイツと術方の心気を感服する一喝を
興ふ。この瞬間法は普通の施術法に経験を得たるのちに行ふべし、又既に一回術に入りたる者は二回目より
本法によるべし
（六） 藥物應用催眠術
素人が強りに投薬することは國法上嚴禁されたる所なるも、而し普通人が自由を用ひて、老若男女を薬物は沢
山あり、一例をあげれば、水、塩、砂糖、醬油、酢、ミカンの汁、ラムネ、ハツカなどの類にして、これら
は何の催眠作用もなき安全な薬物のものなり、こゝに解得せんとする方法以上の如きものを用ひて、早つその
催眠量も極めて小さく僅かに一二着なるを以つて絶対無害なり。かゝるものが催眠の助けになる、とする
上我々は昨日の會身の度毒に催眠するではいかと云はれる方があつても知らぬが、そんな人は「心理」
を知らぬ學識にして尚くも本会の會員諸君の中には、そんな人は一歩もなきことと思ふ。
今日でも未開地へ行けば、ハミが粉とかメリケン粉の如きものも、これに胃腸病の名薬なりとて服用
させれば身実効が上がるとの話あり、又或る小学校の教師は自身の腹病を講ぶるさま、塩湯を飲んで、こ
れは腹病の妙薬なりとて大へしとて、数分を出せしめてその塩の腹病治りしと云ふ。特殊の藥物を除きた
る普通一般の凡薬は藥の實質の効くこと少なく、その性質や効能書が薬効に預つて方ありと云ふ、何れ博士
推奨とか一大新発見だとかのレッテルでも貼つて置けば確かに効が多くなりと信ず、家傳など梅し時代お
くれの治癒を施し、それが新進の學術以上に表効するは往々見づくる所なり。
さて催眠水の製造法を解釋すること、せん。まづ塩、砂糖、ハツカなど、（醫學かものおれは何れでもよし）を
混合すれば奇妙な味のものになるから、それを外観に立派なる瓶に收め催眠薬と書いた紙を貼付しをき、施
術の際にその粉を少しばかりをゴツプに入れて水と共に巧みに暗示し下ら服用せしめると、而してその後は次
の如き暗示を興ふ、君は今僕がエイツと一声すると術にかゝる、術にかゝる

かる、... 賭承と夫にパツスでも行へば一層有為なり。又ハンカチに春料を積し、腹意より誇事するものも一方便なり。

(七) 多人衆を同時にかける方法

多人衆と云ふも一時に百人十人と施術することは不可能なり、普通三四人以上十の五人迄を適当とす。まづ施術せんとする者を一室に集め、... 一度に術にかかす、或は私のこの術の威力を疑視して下さい、... 目をとじて下さい、... 目が一瞬のうちに一人残らず催眠します。術にかかつた人は皆少し頭が下がります。その術は普通の方法に於いて行はるべし。

(八) 動物催眠術

獅子、馬等の種族は鋭利なる爪牙、三つなる力を所有すれども、... にして放足、又虎に纏縛あり、若し彼等が全力をつくと、... 而るに事実は易々として、獅子や虎の鋭利なる爪牙は如何、即ち早業催眠術には鋭き眼光、... 若し平常の如く健脚を以つて走れば、其自身安全なるべく、平業の如く自若として、... 北海道の高尾龍に遭逢せば、一種の催眠にかゝり不動となり、... 人と異なる動物は、暗示の感觸困難につき、... 動物催眠と名づく。今その手段を示せば右の如し。

小蛇の類は指先で寸時押へておき、彼等がその手を放てば不動となり、又虫に口を近づせ、ユイツと大鳴るときは不動となるものなり、... 犬や猫はその首すじをつかみて五六回小動かし、... トカゲや蛙も目を下につけ、動かぬやうに四肢を押しつけ、... 最も施術し易きは鶏なり、... 放つる時はそのまゝの姿態を保ち、... 所にて行ふがよ、二三四回施術せば手をふれたるのみにて、... 中や馬の如き大なるものも、... 念力を減らすれば催眠することあり。

(九) 絶對催眠術

普通一級の人には上篇に記せる方法にて必ず入術するものなり、... には必ず催眠し得るものなり。即ち上篇に記せる事項をよく熟讀して、... には最も施術困難なる人あり、... 催眠術は決してかゝるものにあらず、... がたし。従来かゝる人は一般術者は難物として、... 妙なる暗示) あるいは是等の人もよく術中に習得するものなり、... ること困難なるも、今その暗示法の一則を示すこととすべし。... の士は本會を維持せんにご出陣の上、その実技を心得せらるべし。

さう前述の、後者僅儀補すの忠告の色々の術をうけ何ぞの感もなしと云ふ人には、まづ術者はその術
111の方法眼を尋ね、さも望まじく、或もマジとある能成のものと云ふ、その人は、そんな方法で術をか
けましたか、それでは、うなづかしたとすると、ア、ア、ア、と云ふ時は、術者は自己の術にかゝらざるを誇り
如く又、術者たる如し、次に術者は被術者の術を演習し、手を動かすを見つめ、その術は、術者より、術者より、術者より、
ろさたるが如き、術者にて、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
運して、おませ、今後はア、ア、ア、の術を見、手を動かすを見つめ、その術は、術者より、術者より、術者より、
した、術者の方法をもちて、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
の術に、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
今、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
術師に、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
大なる、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
かる、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
つて、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
肺病に、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
人の、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、
右は、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、術者より、

第一章 催眠術 術者 術者 術者

第二章 念力 感應 術 奥儀

余は如何にせば何人もが最速の念力を得られ得るやについて研究多年、之に最も迅速的確に感得する
も有効なる念力法を述べてんす。

- (一) 傳想上の第一要儀は、その目的物の念力を専注するにあり。只一途念力の傳達を信じて疑はざるにあり
いかにあるべきを、疑心暗鬼を、生じておては成功おぼつかふし。
- (二) 地が王陽明だつたと思ひが、其弟子が無念無想の困難なるを嘆息しとて、其念の念は正念の念なりと唱破せ
り。目的思念のみ、念力を得るに至れば、即ち精神統一として、一種の靈妙力を察得するものあり。初修者に
して、難念慮を起りて、目的思念を究つて得ざる者は、本書に示せる方法を修するに必要あり。統一力微弱
の時は、長時間に亘りて思念するか、屢々思念を行ひ、雨滴の如き微細の力も回重をれば、石をも穿つたり。
(三) 念力法は、正坐して行ふか、又は椅子によるべし、臥して行ふは、睡魔の弊ひて思念の中斷ざる要あり。
而して、後述の瞬間精神統一法を行ひて、疑念に入るべし。
- (四) 瞬間精神統一法。まづ正坐して、身より極度に呼吸し、下腹部に溜息し、口よりスーッと呼吸する、この呼
吸法三回行ふ。次に首の方を抜き、頭を急速に左右に廻轉すること約二十回、前後に頭を屈すること約二
十回にして、靜かに次第に止む。この時に及びて、難念も亦慮もあることなく、最初よりの瞬間僅かに二分
外を以て、施行し得るなり。

112 普通呼吸法と云ふは、相手の腕に乘じて、腕を握り、我が呼吸を丹田へ氣を注ぎ、其の氣は、
下一寸五分の所を云ふ、心に氣を注ぎ、我が呼吸を丹田へ氣を注ぎ、其の氣は、
一、二、三、と云ふ、例へば、伊藤一刀齋が、
一、二、三、と云ふ、例へば、伊藤一刀齋が、

喝よく精神を大興奮の五臓を感得せしめ、その利休が加藤隆正と試合で勝ち、其後軍本飛騨、藤原十傳、
 などの武術の達人の里にたると云ふ。
 二、に述べんとする念力感得術とは、念力を瞬間に他に移送する方法なり、能達せる念力感得術による時は
 長時間を必要とせざれども、本法は瞬間的に傳達し得るなり、變術者たるものは非本法の心得をかるべからず
 例へば、突然自己の身に危害を及ぼさんとしたりする時、暴徒を止むるが如き時、路上に行き倒れる病人に施術す
 るが如き場合には本法が進行を速するなり。さてその方法は
 然濟子に「ワンと力を入流へ生理的の力を入るは長指指筆等の方便にして、普通の場合に力を入るは葉
 物なり」充念目的物を選定して、目的を成すに致し、その時、暴徒を止むるが如き時、路上に行き倒れる病人に施術す
 是を場合に依りては数回くりかへすなり、瞬間に致すに思ふると必軍あり。器運の極に至れば一喝よく
 難病を秋おはるとより、人馬を倒し、筋力を弱るに至るもあり。平素よりよく練習しなくべし。直接教授から
 は反響を生ずる念力出づるに指す。

要 氣 射 法

人体の靈氣を治療上に用ふるもの少からず、既に下篇に於て説明せるも、例へば松本道別氏の人体ラヂウム
 太極道の愛子教、禿山欽心氏の人体放射線、渡辺氏の愛の光波、兼田氏の靈光線、其他アルナ、人骨メケネ
 ヴト、は物質電質などと云ふが如し。
 本法は多く治療に用ふるものにして、其方法は精神を統一し、病態を凝視し、口をつばめ、細く長く
 吹息するものとす。吹息の際に「我が靈氣により君の病は必ず治ると」の確き思念が必要なり。
 人体よりの放射線は今や各國の熱心なる心靈学者により、着々と研究せられ、中央にて見得るはもとより、
 その質量も色もで見見せられつゝあり。

第二章 念力感應術奥儀 光誌

第三章 治療法秘訣

精神療法の大畧は既に前中下の各編に於て詳述したれば
 こゝには省略すべし、適宜参照せられたし

施術法第一法 氣合療法

適應症

齒痛。頭痛。腰痛。胸痛。足痛。
 肩凝。其他一般疼痛

一、受療者の多くは現在苦痛しつつある人なれば、豫期暗示は簡單なるを要す。單に夜夜の時日、苦痛の長
 年を聞き、「あーそーやすか、わかりました、次してご心配ご無用、ギョツト治りますからご安心下さい」
 と最正なる口調をもつて感得的に豫期暗示を告ぐる。

二、被術者を仰臥。椅子、正坐の何れかによらしめ、苦痛を告げ、必要をとりしめることが必要なり、
 例へば「それでは長からアナタの〇〇を治療します、私の術は信じておても敷つても少しも効果に異ならな
 りません、施術中は何を考へて居られてもよろしいが、なるべく正しい姿勢で居て下さい」と施術を開始
 三、次に被術者の病態詳細に適宜指示し、約四五分を経た頃、被術者の呼吸に注意し、被術者が息を吐いてし
 まつて、今蓄に吸はんとする時、又イツと嘔吐一喝し、直ちに閉塞を入れず、唇の〇〇は治つたツツ、ズ
 ヲズンよくなつてくるツツと長に流れず短に吐かせが明瞭に暗示する。この場合の氣合は前述の念力氣
 合法を用ふるなり。即ち瞬間に治療思念を氣の氣合を以つて打ち込むなり。氣合を見合すべきは重病者
 精神を脱せる人、六才以下の小兒等なり。

四、本法による時は一回の治療時間僅々十分を出でざるを以つて、激痛患者、多数の人を治療するに適当な
 り。

五、気合及び暗示を興へ終りたる時は、サアもうおふだに充分射は傳つた、そのまゝサ時目を閉じて休んでおて下さい、大変風持よくなつておますと暗示し、四五分の後、よろしい目を開いて下さい、にて施術を終了するなり。

六、施術終了後患者に施術経過を質問し適宜追加暗示を興へべし。施術に熟達せば一々尋ぬる迄も亦患者の顔色をもつて直ちに察し得るものあり。施術中の気合暗示がまとして効を奏するものなれども、この施術終了後の追加暗示、施術前の應接振が又あづかつて大いに力あるなり。

- さて右の質問に対する患者の答へは左の五つに分類するを得。
- (A) おかゆさまでスツカリおほりました(全治)
 - (B) 有がたうございます、大へんよくなりました(良好)
 - (C) ハイいくらみよろしゆうございます(半治)
 - (D) まだハツキリわかりませんが少しは良いやうな気がします(稍良)
 - (E) ハイ同じやうであると存じます(無効)
- 術者は右の答へを聞けば直ちに適當なる追加暗示を施すべし、今その一例を示すべし。
- (A) アーソうですか、それは結構です、私の方法は決して再発するやうなことはありませんからご安心下さい。而し愈のため明日もう一回治療してあげます……
 - (B) 時間がたてば一層よくなりますよ、モ一八九分迄待つておます、明日モ一回かけてスツカリを戻してあげます……
 - (C) あーソうですか、此療法は時間が経つに隨て次第によくさいてきますよ……以下同じ……
 - (D) 明日の朝になるとキツト効いておるのかわかります、此術はうけた当座はあまりハツキリ分りませんが、一晩経てば、驚くほど効いておます。
 - (E) あなたのご病氣は慢性的ですから一回ぐらゐでは効が知れぬかも知れません。そんな病氣はドンナ

症 應 速

七、精神療法の原理原論をご存知の諸君なれば、かゝる種々な方法で療治するやうな事を思ひ及らるゝ人もあらざるべし。急性の疼痛は十中八九一回の施術を以て即治するものなり。注意として一回で治せるものといへども更に催賦療法等にて、根治した決して再発しないものと一回のみで治せるものは完全なり。

施術法第二法

(催眠療法)

- 一、神経系統の病氣、……神経痛、諸種の麻痺症、喜症、神経過敏、習慣性、手足不随、リョウマチス、カツケ、神経衰弱、デムカン、ヒステリ、不眠症、その他一切。
- 二、眼疾、青腫痛、頭痛、耳鳴、森林毒、軽度のもの全部。
- 三、精神病、軽度のもの全部。
- 四、泌尿生殖器系病、月経閉止、月経困難、月経過多、陰萎、早洩、遺精、夢精、其他。
- 五、呼吸器病、ぜんそく、咽喉カタル、肺炎等。
- 六、胃腸病、消化不良、胃液不足、胃酸過多症、胃拡張、胃カタル。
- 七、其他の内臓病、腹膜炎、盲腸炎、心臓病、肝臓病、脾臓病、腎臓病、膀胱炎、痔瘻、眼病、近視遠視(軽度のもの)、夜盲、網膜知覚減退、色盲、耳及び鼻の病(大なる外科手術を要せざるもの)。
- 八、其他全身病、皮膚病、血行病、吐瀉等にも應用する。

悪癖全愈

どんな性質の病を患にしてゐるか○現在病室に在るか又は働さつゝあるか○宗教信仰の有無○夜はよく眠れるか便通はあるか○受療の差に精神療法に及ぼすものがあるか○
右の如きことを記したる病状報告書が到着せば術者はそれにより、施術通知書を依頼して患者に送附するなり。今般りに世に男子の胃腸病(病室には臥すべし)の如きつゝある人(患者に共感として一例を示せば)

施術通知書(受療者の心得)

- (一) 昨日お手紙及び之の書一紙正に受とりました。ついでには○月○日より自今三週間療法します。受療中の注意は(一)受療中は眠る時にせず、精神を静かに持ち、身体を養生を怠り暴飲暴食や不規則な食事を止め、(二)く、(三)色々の治療法に注意しないこと、(四)精神療法は医師の指導するに依りて行ふこと、(五)精神は三週間をもちて一期とす、一期以内は受下の胃腸病は必ず平癒せず、方一せ一日間中に全治せざる時は引つづき二週間の治療を行ふ、(六)術中は最初の数日活動しからずとも往々最後の五分間を以つて運動を奏するものにつぎ忍び行ふは固く禁ず、(七)術中は毎夜寝る前に(何時でもよし)ゆつたりと精神を落つけ静かに眠つて、目を閉じ、さて微に声を出して呼吸は毎日連続して行ふべきであるの旨、だから胃腸病はズン／＼良くなる旨と唱へること三四十回にして後安心して寝につかされたし、(八)初果の有無にかゝらず一週間に一度の報告は必ずせられたし、(九)その報告により更に追加療法を施す必要あり

第三の場合

第二の場合の如き通知書を出すと共に第一の場合の如く突如と患者すすし、この方法は最も効果大にして又改良療法として完全なるものなり。

上編 中篇 下編 極意篇 合冊 靈術秘書

精神療法は人間の根本動力たる精神に對して如何なる病に對しても有効にして、然に精神的、重原因の諸病に對しては現代物質療法は遠く及ばざるものあり、而して決して可能にあらざり、切斷したる指を再生すること能はず短かき尺を伸長せざる、外科的手術を要するもの、其他小數諸病の疾患にありては物質療法に及ばぬものあり、
精神療法による時は凡そ幾何の日數にて癒し得るやと云ふに、もとより諸病の種類、重症、術者の技術人格の如何により一受せざるは勿論なるも、單なる精神、精神的原因の特殊の病(物質療法にて一ヶ月も二ヶ月も百方手をつくせし難物でも)は大抵一回にて全治し、普通内臓諸病は四五回乃至四五十回迄に全癒するものなり、尚時宜すべきは世人の中には精神療法は一回か二回で即癒するものなりと考へ、僅かに一二回の手術を以て効果の有無を論ずるワカラスヤがあれど、物質療法で百方手をつくせし難物も初本を病気が一二回で根治すると思ふは誤りなり、余治日梅は物質療法とほぼ等しきものなり、桃栗は三年にして実を結ぶ柿は八年にして結実す、是自然の発動なり、種を幾回にして効果なしと雖も、術者は落着く必らず早急をせしめれば八年にたり、受療者も自己の病氣をわきまして、息がやあせらず、ひたすら療法を信じて受療する、これ全快の早道なり、本会が授けられたる小冊子なりと雖も術上の注意教諭は残る所もなく全快をつくるなり、もし諸氏にして本書を懇讀玩味、熱心に修業せらるゝならば必ずや実行し得るものと確信す、現に會員諸君の中には著々受療の上、その有効なるを發表せられつゝあり、
棚架中のぞみ、如に貴下のマシメなるご研究と、著つて何ぞ不正應用せられざることを祈念す、
(本書は純靈術の書につき、人身生靈衛生學等を以つて表面を埋めるを避けたり、一とほりは他書について研究せらるべし、細しは元に出れば度々の養成を怠るべからず)

大正十五年七月一日印刷
大正十五年八月一日改正再版發行

著者 孫作恭

松原清一

姫路市下寺町六〇

印刷所 甲刷竹七

姫路市下寺町

印刷部

石川田菊次

發行所

兵庫縣姫路市下寺町六〇
靈道研究會本部

非賣品・納本清

終

